
マナ娘のまなびや

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マナ娘のまなびや

【Nコード】

N1770Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

マナは愛美谷学園^{まなびや}に入学したばかりの高校一年生。愛美谷学園は、日本有数の魔法科専門の高校だ。

のんびり気味でマイペースなマナ。小学校からの腐れ縁である、ちよっとうるさいカリんと、背のすらりと高い美人タイプのレイのふたりとともに入学式に臨む。

その入学式であるトラブルが起こる。それを鎮めるマナたち。一緒に手伝ってくれた可愛い男の子、セイカも交え、マナたちの学園生活はスタートした。

魔法使いな高校生たちの織り成すファンタジーな日常物語。

軽い感じです。っていうか軽すぎです。読み返して恥ずかしくなるほどに^^;

まあ、気軽に読みください。

「ほら、マナちゃん。早くしなさい。遅刻しちゃうわよ。」

あたしを急かすお母さんの声は、とつてもものんびりした口調だった。

思わずあたしも、ふにやうと気を抜いてしまいがちになる。

って、ダメダメ。遅刻するんだってばっ！

「えーん、早く起こしてって言ったのに。はむっ。ふおれひゃあ、いつふえひまふ！」

マーガリンたっぷりのトーストを口にくわえ、あたしは玄関へと急ぐ。

「だってえ、お母さんだって朝は弱いんだもの。あつ、マナちゃん、食べながらなんて、はしたないわよ。」

「ふえも、ひょうがないもん！」

靴を急いで履こうとするけど、焦っているからか、なかなか上手くいかない。

「姉ちゃん、落ち着けよ」

弟のイサキちゃんが呆れ顔であたしを見てる。

ふにやう。姉としての威厳が。今さら遅すぎると思うけど。

イサキちゃんは、

「今日は入学式なんだろう？ 初日から遅刻すんなよ？ 恥ずかし

い

なんて言いながら、しかめっ面をしていた。

「わふあつふえるよ……。……いつふえひま〜ふ！」

やつのことで靴を履き終えたあたしは、急いで玄関を飛び出した。

「ほら〜、マナちゃん〜。カバン〜、忘れたらダメでしょ〜？」

「ふにゅ〜」

慌ててお母さんの手からカバンをつかみ取る。

「あとでお母さんたちも行くからね〜。マナちゃんの晴れ舞台をしつかり写真に収めなくっちゃ〜。お父さ〜ん、私たちも準備しないと〜」

「もう僕の準備は終わってるから、あとはユメさんの準備だけだよ」
「あらあ〜、私まだ全然だわ〜。大変〜」

ほんとに大変だっと思っていたのかいないのか、家の中にもそのそと戻るお母さん。

うん、絶対にあたしの母親だ。間違いない。

って、ふにゃ〜！ そんなこと考えてる場合じゃなかった〜！

「こんどこふお、いつふえひま〜っふ！」

三度目の行ってきますを口にして、あたしは走り出す。

「あんまり急いで、転ぶなよ」

イサキちゃんが余計な心配をしてくれる。
いくらあたしだって、登校中に転ぶなんて、週に一、二回くらい
しかないよっ。

……余計な心配、じゃないのかも。

とにかく、今日から高校生。

心機一転、あたしは頑張るのだ。

初日から遅刻なんて、絶対にしないんだから！

あたしは、綾音愛^{あやねまな}。今日から愛美谷学園^{まなびや}に入学する高校一年生だ。

うちは、おっとりなお母さんの夢^{ゆめ}、優しいお父さんの希望^{まれみ}、しつ
かり者な弟の勇氣^{いさき}、そしてあたしの四人家族。

明るく笑顔の絶えない楽しい家で、あたしはそんな家族が大好き
なのだ。

今日もいつものように、トーストをくわえて走るあたし。

目指す愛美谷学園は、結構有名な学校だったりする。

知つてのとおり、日本では魔法が一般教育に加えられ、普通科の
高校でも、最低限選択授業で勉強することになっている。

そんな中、ここ愛美谷学園は、日本でも有数の魔法科専門の学校。
家から近かったし、お母さんの母校でもあるので、小さい頃から
憧れていた。

そんな憧れの高校に入学できて、あたしはとても幸せな気分。
入学式の前日に、胸が高鳴ってなかなか寝つけなかったのだって、
当たり前前ってもんだよね？

とはいえ、遅刻はダメ！ 今は走らなきゃ！

あたしは走る走る走る走る転ぶ。

.....。

ふにゃ〜。膝すりむいたよぉ〜。

でも、あたしは負けない！

なんの勝ち負けだかわからないけど、素早く立ち上がってあたし
は愛美谷学園の正門をくぐる。

そして門をくぐると同時に、予鈴が鳴り響いた。

ふ〜、間に合った〜。

「ギリギリセーフだったみたいだに、マナティ！」

むっ。

振り向くあたしの目に飛び込んできたのは、髪留めに鈴をつけてチリンチリンと音を鳴らしている、小柄な女の子だった。

おおるじかりん
大瑠璃歌鈴ちゃん。小学校からの幼馴染みだ。

ウグイス・コマドリと並んで美しい鳴き声と言われる鳥、オオルリの名が示すとおりなのか、とっても綺麗な声をしているのだけ……。

ひたすらよく喋る、つまり、うるさいのだ、この子は。

「トーストをくわえながら走ってる姿が、思い浮かぶわよね。ってことで、おはよう、マナティ」

そして、その隣に立つ長身の子は、うるしはられい漆原麗ちゃん。カリンちゃんと同じく小学校からの幼馴染みだった。

すらりと長い黒髪が印象的な美人タイプ。あたしもレイちゃんみたいに綺麗になりたい。

「ふにゅ〜。マナティって呼ぶのはやめて〜！」

あたしは頬を膨らませる。……こういうところが子供っぽく見られる原因なのかな。

「ふふ。可愛くていいあだ名だと思うけれど」

「うに。マナティのあのふてぶてしい体格と優しげな眼差し、もう

最高に可愛いと思うけどに」

……カリンちゃん、相変わらず微妙な趣味してるわ。
それはいいとして。

「ふにゃ」。マナティは中学で卒業なの！　これからは、普通に
マナって呼んでよー！」

思いつきり駄々をこねながら、あたしはふたりを精いっぱい
の鋭い眼光で睨みつける。

「怒った目もラブリーで、マナティにそっくりだに……って、
わ、本気で怒っちゃだよ。わちが悪かった、謝るから許してに
ゃ？」

うん、カリンちゃんはどうかかわってくれたみたい。

若干、強制力を行使した気がしなくてもないけど、気にしちゃい
けないよね。

「ふふ。ま、本人が嫌がってるあだ名で呼ぶなんて、いじめみたい
だしね。マナって呼んであげるわよ」

そしてレイちゃんのほうも、あたしのお願いを聞き入れてくれた。
思わず笑顔になる。

「……不本意だけどね」

ちょっと視線を逸らして、そうつけ加えられた。ひと言多いのも、
レイちゃんの特徴だ。

レイちゃんの場合、そういう言葉は照れ隠しだっていうのが、あ

たしにはわかっている。

ほら、視線を逸らしたレイちゃん、微かに頬が赤くなってるし。

でも、高校になってもやっぱりみんな一緒なんだ。

この高校に入学することは聞いてあったけど、実際にこうして楽しくお喋りできると、やっぱり素直に嬉しいな。

クラスも一緒だと、もっと嬉しいのだけど。

「ねえ、クラス分けて、どうなってるのかなあ？」

あたしの声に、ビシッと指を差すカリンちゃん。

「ほら、あそこの掲示板に貼り出してあるよ」。わちもまだ見てないんだけどに」

「もちろん、わたくしもね。三人で一緒に見ようと思って待ってたのよ」

わあ。やっぱり持つべきものは友達だ。

もちろん、一緒に見たら同じクラスになる確率が上がる、なんてことはないのだけど。

でも、喜びでも悲しみでも、なるべく分かち合いたいって思うものだよ。

ふにゃん。やっぱりふたりとも大好き。

というわけで、あたしたち三人は足並みを揃えて、いざ掲示板！
笑うか泣くか決戦のときを迎えたのだった！

「大げさすぎだに」

……カリンちゃん、あたしの心の声にまでツッコミ入れないで。

「わちは……。うに、月組なのだ。ってことは、レイっちとは一緒ってことか？」

「ふふ、そうね。私も月組。予想どおりって感じだけれど」

この学校のクラスは、月組^{つき}、火組^ひ、水組^{みず}、木組^き、金組^{きん}、土組^{つち}、日組^{にち}の七クラスある。

魔法科ということもあり、基本的に魔法の得意な子が入学するのだけど、人にはそれぞれ得意な魔法の属性がある。

属性はたくさんあるけど、七つの曜日にまつわる属性が、主属性と呼ばれて憧れの対象なのだ。

そしてレイちゃんは、月属性の魔法を得意とする優等生だった。主属性の魔法を得意とする生徒は、通常その属性のクラスに配属されるから、レイちゃんが月組なのは予測できたってわけ。

「マナティは？」

「マナティ言うな！……つと、あつた！あたしも、月組だよ！」

あたしは大声を張り上げてはしゃぐ。

カリンちゃんとレイちゃんと一緒のクラスだ。よかったあ！

「三人一緒だに。さすが、うちの腐れ縁は、すごいに」

「腐ってないもん！」

「ふふ。まあ、クラス替えのない学校だからね、ここ。ふたりとも、

また三年間よろしくね」

「うん、よろしく〜！」

こうして、あたしは幼馴染ふたりと一緒に高校生活をスタートすることができたのだった。

「入学式の会場は体育館だに」

「高校生活の記念すべき第一歩だよ。ふにゃ、わくわくだわっ」

「わくわくはいいけど、急がないと。マナが来たのギリギリだったし、時間ないわよ」

手を握り合ってきやいきやいとはしゃいでいたあたしとカリンちゃんに、レイちゃん冷静な声を向けてくる。

ふにゃ、そうだった！

門に入るのが間に合っても、入学式に間に合わなかったら意味がない。あたしたちは急いで体育館へ向かった。

「あ、やっぱりわたくしたちが最後のようね。でもまだ始まってないわ」

「一応セーフなのだに」

「ふにゅ、でも、ちよつと視線が痛いかも。早く席に着いちやおう」

こそそと腰をかめて、月組の列の最後尾に三つ空いていた席へと向かい、素早く座る。

「ふ、間に合ったのだ」

「これから入学式か。ふにゅ、これで正式に、憧れの愛美谷学園の生徒になれちゃうんだね。ふにゃん。感激い」

幸せ気分に乗るあたしの声は、思いのほか大きかったようで、

「こら、マナ、声が大きい」

レイちゃんの叱責の言葉とともに、前の席の人にまで抗議の視線を向けられてしまった。

はうゝん、入学初日から、あたしってば変な子って思われちゃうよおゝ。

「変な子なのはもとからだし、今さら気にすることじゃないにゝ」

すかさずカリンちゃんからツツコミが飛んできた。

ふにゆゝ、ひどいゝ。

それより、さっきもそうだったけど、どうしてあたしの心の声にツツコミを入れられるのゝ？

「マナの考えてることなんて、顔を見れば一目瞭然なのよ」

レイちゃんがそんな解説を加えてくれた。

ええええゝゝゝゝ？ それはちよつと、嫌かもおゝ。

そう思ったけど、カリンちゃんもレイちゃんも、つき合いが長いから、よく理解してくれているってことだね。

やっぱりふたりはあたしにとって大切なお友達なんだと再認識する。

そんなあたしの顔を見て、カリンちゃんもレイちゃんも、温かな微笑みを向けてくれていた。

「あつ、入学式のプログラムが貼ってあるにゝ。どれどれ……」

正面に向き直ったカリンちゃんが、貼り出してあるプログラム内容を読み始める。

「1・学園長のお話」

ふむふむ。

「……以上、終わり」

ふむ……え？

「終わり……？」

「終わり」

きょんとした目でカリンちゃんを見つめ返すあたしに、きつぱりそう言い放つ彼女。

自分でも貼られてある紙を見てみたけど、うん、確かにそう書いてあるね。

「さくつと終わりそうだし」

なんて思っていたあたしたちの認識は激しく甘かったと言わざるを得ないだろう。

ともかく、入学式のプログラムにある最初で最後の項目、学園長さんのお話は、それからすぐに始まった。

壇上に加ってきたのは、センスのいい、ゆったりとした服を着た女性だった。

どう見ても二十代くらいにしか見えないけど、学園長なんていう立場にいる人なのだから、そんなに若いわけではないよね。

そういえば、お母さんの同級生だったって聞いたような。「驚くわよぉ」なんて言っていたのは、このことだったのかな？

「はい、みなっさあ〜ん、元気ですかあ〜？ わたくしは、とても元気でえ〜っす！ うふふ〜！」

……うあ……。なんか、すごい人っぽい。

姿を見て驚き、第一声を聞いて驚き。

お母さんの言っていたことは正しかったんだわ〜。

だけどそれからすぐ、あたしはさらに驚くこととなる。

学園長さんのお話は、超すごくとってもとてもなく果てしなく限りなくこの世のものとは思えないほどに、長かったのだ。

「ここ愛美谷学園は、ご存知のとおり、魔法教育にとっても力を入れてる学園です。うふふ、そんなこと言うまでもありませんでしたね。合格したみなさんは、素質のある方々ばかりでしたものね。」

ですが、基本は何事においても重要なのです。そもそも魔法が発見されましたのは、およそ百年前。それからたくさんの先人たちが研究に研究を重ねて、現在ではごく当たり前な力となっています。それでも思いどおりに制御するのはなかなか難しいものです。そのための教育を小学校から行なっているのは、みなさんもご存知のとおりですよ。

義務教育での基礎にとどまらず、高校、大学でも魔法は基本授業に取り入れられてはおりますけれど、その中でもとくに魔法を専門に扱う学校は、この魔法大国と呼ばれる日本でさえも、まだまだ数は多くありませんよね。

ですから数少ない魔法科のある学校に入学を希望する人はあとを絶ちません。そしてこの学園は、日本でも有数の魔法科専門の高校。何倍、何十倍もの難関を乗り越えて、今あなたたちはここにいますよ。」

おめでと〜〜！ ドンドン、パフパフ！ 自信を持って、有意義で明るく楽しく、わくわくでドキドキなぷにぷにしたゾクゾクするような学園生活をエンジョイしてくださいね〜！」

うわぁ〜……ちょっと、というかなかなり、というか完璧にというか、到底ついていけない感じだわ……。

だいたい、ぷにぷにな学園生活ってなによ〜？

でも、当然ながらそれでお話が終わるはずもなく……。

「ぷにぷにで思い出しましたけれど、うちで飼ってる猫ちゃんの肉球がぷにぷにで……」

なんだか、すでに学園とは関係ない話になってるんだけど。

ともかく、「あ、そうそう、そういうば〜」とか「それから、こんなことありまして〜」とか、そんな感じで学園長のお話は、延々々々々々々々々々々々と続いていった。

「飽きたよ〜、もう寝ちゃっていいかに〜？」

「ダメだよお、カリンちゃん。こんなでも一応、学園長さんのお話なんだから〜」

「でも、すでに完全に雑談になってるのだ。一時間以上喋ってるしに〜。そろそろわちは限界なのだよ〜」

カリンちゃんはほんとに限界みたい。うにゆ〜。あたしも限界っぽいけど〜。

「あらあら、随分と話してしまいましたね〜？ それでは、そろそろ……」

「おっ！ やつと終わるかに！？」

カリンちゃんが素早く反応して息を吹き返した。……死んでたわけじゃないけど。

でも、敵（学園長さん）はそんなに甘くはなかった。

「そろそろといえバ〜、ソロの木というのがあるのですけれど、あつ、ソロという名前は俗称で、シテ類のことなのですけれどね〜

……」

やっぱり、まだ終わらないみたい。

「ふふ。学園長だからかしら。……ガクツ、延長！　みたいな」

うわぁ、レイちゃん、オヤジギャグ……。

とっても美人で背もすらっと高くて憧れているレイちゃんだけど、
こういうところだけはマネしたくないわ。

あれからさらに一時間くらいは経っただろうか。学園長さんのお話は、まだ続いていた。

ざわざわざわ。周囲の生徒たちからも、さすがにざわめく声が聞こえる。

それはそうだね。いくら校長先生とかのお話は長いってのが自然の摂理だとしても、二時間越えなんて、前代未聞だよ。

ちらつ、と視線を隣に送る。

レイちゃんは、背筋を伸ばしてしっかりと話を聞いている……か
と思ったら、目を閉じて寝てるよ。

ざわざわざわ。ざわざわざわ。ざわわざわわ。

周りの生徒たちから発せられる私語の音量もかなり大きくなってきていた。

その声は壇上でお話している学園長さんの耳にも届いていたのだろつ。学園長さんの顔が引きつっていくのが、目に見えてわかった。

「みなさあ〜ん、まだお話の途中ですよ〜。静かにしてくださいませんかあ〜？」

学園長さん遠慮がちに、そうお願いする。でも、周りの生徒たちはまったく聞く気配がない。

「もう限界だよ〜」

「うん〜、さすがにダメ〜」

「おトイレに行くとか言って抜け出しちゃおうかな……」

「うう〜、もう少しの辛抱……かなあ？ でも、怪しいところだよねえ……」

口々に文句を言う生徒たち。

「いい子だから〜、静かにしてね〜？ お願いよあ〜」

ああああ、学園長さんのこめかみがピクピクしてるのが、この位置からでもはっきりと見えるよ！？

「ふにゆ〜、学園長さん、怒っちゃいそう〜」

あたしは思わずつぶやいてしまう。

「うるさくなるのも仕方ないと思うけどに〜。二時間はないよ、二時間は！」

それに反応するカリンちゃんの声は、周りの喧騒にも乗せられたのか、かなり大きかった。

「わあ、カリンちゃん、声大きいよぉ！」

それを止めようとするあたしの声も、大きかったわけ。
 そんなあたしたちの声がダメ押しになったのか、ついに学園長さ
 んはブチ切れてしまったようだ。

「静かにせんか、わりや〜〜〜〜〜!!」

グオオオオオオオオン！

次の瞬間、学園長さんは大きな咆哮を上げながら四方八方に炎のプレスを吹く、なぜか鮮やかなピンク色をした巨大なドラゴンへとその姿を変えていた。

「な……なんなのだ、こりは〜!？」

カリンちゃんが綺麗な声で叫んでいる。

そりゃあ、叫びたくもなるよね。体育館で入学式をしていたはずなのに、いきなり目の前でドラゴンが炎のプレスをまき散らしているなんて。

体育館は今や、吐き出された炎が燃え移って大惨事。

首を高々と持ち上げたドラゴンによって、天井も抜け落ちてしまっていた。

水組を中心に、一部の生徒が率先して消火活動や避難の手伝いをしていたけど、臨機応変に対応できる新入生なんて、ごく稀なケース。ほとんどの生徒は、ただおろおろするばかりだった。

こんな状況で、先生方はなにをしているのか。そう思って見回しても先生方の姿はない。

生徒たちを危険な場所に残したまま、真っ先に逃げ出したってこと!？

ふにゅ〜、ひどいよぉ〜!

ボウワッ!

おろおろきよろきよろわたたばよよしていたあたしの足もとを、炎がかすめた。

今は先生方に対する文句を言ってる場合じゃないみたい。

でも、あたしにできることなんて、早く逃げるくらいしか……。

「なに言ってるのよ。わたくしたちは魔法使いなのよ?」

ふと、背後から声がかかる。

さすがに今の状況には焦っているみたいで声が上ずってはいたけど、それはもちろんレイちゃんだった。

あたしはべつになにも言っただけで、いなかったのだけど、やっぱり考えていることなんてお見通しのだろう。

びしっと背筋を伸ばして立ち、鋭い目つきでドラゴンを睨んでるレイちゃんの姿は、ホントに凜々しい。
ふにゃ、なんて男らしいんだろう。

「こら、どさくさ紛れに失礼なこと考えないで！ わたくしは華麗な淑女ですわよ！」

レイちゃんの叱責の声を受けるあたしのそばでは、カリンちゃんも身を潜めていた。「男らしい」レイちゃんの体に隠れるように。

「……あんだ、わざとやってない？ ……ま、いいわ。ともかく、どうにかしないと」

「う、うん、そうだよね……」

でも、どうすればいいんだろう？

と、そんなあたしたちの目の前を、見るからに危なっかしい、あたし以上におろおろした子がふらふらと横切る。

必死に逃げようとしているのだけど、ほとんど足は前に出ていない上に、今にももつれてしまいそうな……。

そう思った矢先、

「きゃんっ！」

可愛い悲鳴を上げて、その子はあたしたちの目の前で思いっきり転倒した。

「大丈夫？」

慌てて伸ばしたあたしの手を、涙目でつかむその子。

うひゃゝ、なんて可愛い子なんだろう。……神様って不公平だわつ。

「あ、あ、ありがとう……」

やっぱりまだおどおどしながら、その子は微かな声でお礼を述べる。

そんな様子もとっても可愛らしい。やっぱり神様って不公平。

「キミ、早く逃げるのがいいのだよ！」

カリンちゃんがその子を促す。

うん、それがいいよね。あたしはつないだままだったその子の手を引いて出口に向かおうとする。

と、そんなあたしたちの目の前を塞ぐように、燃え盛った天井の一部分が崩れ落ちてきた。

「うわわあっ！」

可愛さのカケラもない悲鳴を上げるあたし。

その腕をつかんで引き戻してくれたのはレイちゃんだった。

「もう、危ないじゃない、ぼーっとしないの！」

「うにゅ……」

あたしは恐怖も相まって、まともな言葉も返せなかった。
レイちゃんは、まだあたしが手を握ったままの、おどおどした子
に向き直る。

「逃げるのも危険な状況だわ。あなたも手伝いなさい！」
「は……はい……」

その子は震えながらも、レイちゃんの勢いに負けて思わず頷いて
いた。

「でも、どうすればいいの？」

あたしは、頭脳明晰なレイちゃんに判断を委ねる。

「そうね……。水組の人たちも頑張って消火活動をしているけれど、
大もとをどうにかしないと」

大もと……ってことは、つまり……。

「あのドラゴンを鎮めないとダメ、ってことだに」
「ええ、そうなるわね」

「で……でも、あんなに大きいんだよ！？ あたしたちじゃ、近
づくことさえできないよぉー！？」

あたしが不満の声を漏らす。あんな巨大なドラゴンを相手にする

なんて……。

と、レイちゃんが、おどとした子に話しかけた。

「あなた、名前は？」

「……えっと、桜実聖架さくらみせいかです」

「得意な魔法属性は？」

「……風です」

「ふむ、いけそうね。じゃあ、こうしましょう」

レイちゃんは、あたしたち三人に手早く指示を出す。
作戦の開始だ！

「うにゅ~~~~っ！」

あたしは気合いを入れて、レイちゃんに指示されたものを具現化させる。

気合いを入れている声じゃないとよく言われるけど、あたしはこれが一番気合いを入れやすいのだ。

カリンちゃんもセイカちゃんも、それぞれ集中して自分の役割をこなしていた。

カリンちゃんは、その綺麗な声で小鳥のさえずりを真似ていた。

彼女は鳥魔法が得意なのだ。

鳴き声のモノマネが、はたして魔法なのかというのは、とっても微妙な気がするけど。

セイカちゃんは、さっき言っていたように風魔法が得意ということとで、辺りにそよ風を吹かせていた。

炎がそこかしこで燃え盛っている状態で、危険な気もするけど、目的は別のところにある。

そして花魔法が得意なあたしは、ドラゴンの姿へと変わり炎のブレスを吐き出す学園長さんの周りに、お花畑を具現化させていた。これも炎が燃え移りそうで危険なように思うかもしれないけど、それは大丈夫。

実際に物質化しているわけではなくて、そう見えるだけなのだ。立体映像みたいなものかな。

たくさんの花に囲まれ、爽やかなそよ風を受け、綺麗な小鳥のさえずりを聞き、ドラゴンは明らかに落ち着きを取り戻しつつあった。それでもまだ、弱まったとはいえ、炎を吐き出し続けている。

やっぱり、あたしたちの魔法じゃ弱すぎるみたいだよ。どうしよう？

そんな焦りをよそに、一歩前に踏み出すレイちゃん。彼女が右手を振り上げると、そこには薄闇が広がった。

レイちゃんの得意なのは月魔法。夜の闇を具現化させたのだ。暴走していたことで疲労が溜まった上に、あたしたち三人の魔法で落ち着き始めていたドラゴンの学園長さん。

辺りが暗くなつて急激な眠気に襲われたのだろう。

今までの暴走が嘘のように止まり、長い首をだらりと下げる。

そしてそのまま巨体を滑らかに倒すと、あっさり眠りに就いてしまった。

「——というわけで、入学式を終わらせていただきますわね。みなさん、これからの学園生活、思う存分満喫してください」

入学式は、何事もなかったかのように閉幕された。

あのあと、大急ぎで戻ってきた先生方の魔法によって、ボロボロになっていた体育館はいつも簡単に修復された。それもほんの一瞬で。

魔法ってやっぱりすごいわ。

学園長さんがドラゴンになって暴れるのは毎年のことらしく、先生方はてきぱきと修復を進め、生徒たちを体育館に戻し、もとの姿に戻って寝息を立てていた学園長さんを起こし、数分後には式の続きが始められていた。

さすがにちよつと茫然としてしまったけど、あの騒ぎも含めて入学式のイベントだったみたい。

お母さんが言ってた「驚く」っていうのは、このことだったんだ。

やがて式も終わり、カリンちゃんが息をつく。

「ふふ、さすがに疲れたに」

「そうね。でも、どうにか鎮めることができてよかったわ。生徒たちでどうにもできない年は、学校全体が燃え尽きるまで先生方は手を出さないみたいよ」

「え？ レイちゃん、知ってたの!？」

「うふふ。実はお姉様がこの学園の卒業生なのよ。本当は話しちゃいけないことらしいのだけれど、無理矢理聞き出しちゃったわ」

……どんな手段を使って聞き出したんだろう……。それはともかく、知ってたなら教えてくれてもいいのに。

「あの……さっきは、ありがとう……」

そんなあたしたちに遠慮がちな声がかかる。

さっきのおどした子——セイカちゃんだった。

「同じクラスの子だったのね」

あたしたち三人は改めて自己紹介し直した。

「セイカさんがいてくれたからこそ、あんなに上手くいったのよ。うふふ、頑張ったわね」

なんかレイちゃん、上目線……。まあ、いつものことが。

「んふ。ありがと……」

レイちゃんの言葉に、軽く頬を染めて恥ずかしそうにしているセイカちゃんは、やっぱり可愛かった。

「こうやって知り合えたのも何かの縁だね」

「うん、そうね！ これからも女子四人で仲よくいきましょう！」

あたしはセイカちゃんの両手を取って笑顔を向ける。

「あ……あの、ごめんなさい。えっと、その……ボク、男……」
え？

思わずセイカちゃんの全身を舐め回すように見てしまう。

「あらマナ、気づいてなかったの?」

平然と言うレイちゃん。

「いや、わちも気づいてなかったのだけに。ま、べつにどっちでも構わないのだ」

愛美谷学園の制服の上着は、男女ともに同じデザインだった。ボタンのつき方が左右逆だけど、ぱつと見では気づかない。

下はどうかというと、女子はノーマルスカート、フレアスカート、タイトスカートの三種類から、男子は長ズボンと半ズボンから選べる。

女子は三種類がかなりばらける感じで、例えばあたしはノーマルスカートだけど、カリんちゃんはフレアスカートだし、レイちゃんはタイトスカートだ。

そして、男子はほとんどが長ズボンを選ぶ。それはそうだよな、高校生ともなれば、スネ毛なんかも気になるだろうし。

もともと男子の少ない学校だから、半ズボンを選ぶ人なんて、いないことのほうが多いらしい。

でも、目の前のセイカちゃんは、半ズボンだった。半ズボンとはいっても、キュロットパンツ風だから、ぱつと見ではフレアスカートと見分けがつかない。だからあたしも気づかなかったのだけだ。

でも……。

あたしは目線をさらに下げる。

……どうしてこの子、あたしより細くて綺麗な足してるのよー！？

「ほ……ほんとに男の子なの？」

思わずつぶやいてしまった。と、すっと横から伸びてくる影。

「ひゃうー！？」

「うん、確かについてるわね」

レイちゃんが手を伸ばして、セイカちゃんの、その……大事な部分をむぎゅっと……。

ふにゃ〜、レイちゃんってば、いろんな意味ですごい……。

「いや〜ん……」

セイカちゃんは顔を真っ赤にして恥ずかしがってる。

「こら、男ならもつと男らしくするのだ！」

「え〜〜〜ん」

カリンちゃんのツッコミにも、涙目でめそめそするばかり。

あたしたちの当面の目標は、「セイカちゃんを男らしくすること」になりそうだ。

ちなみに。

あたしの両親は結局入学式には現れなかった。
お母さんの準備が終わらずに大遅刻したのだ。
一応学校までは来てくれたみたいだけど、入学式はとっくに終わ
ったあとだったらしい。

うーん、やっぱりあたしの親だわ。間違いない。

「今年も盛大にやっているようね」

屋上で長いブロンドの髪を風に揺らめかせながらつぶやく女子生徒がいた。

眼下では、体育館の屋根が抜け落ち、炎をまき散らすピンク色のドラゴンが大暴れしている。

逃げ惑う生徒たちの悲鳴が、この屋上にまで響いていた。

突然ドラゴンの周りの空中にお花畑が現れ、そよ風がその花たちを揺らし、小鳥のさえずりが響く。

吐き出す炎が徐々に少なくなっていく中、駄目押しのようにその巨体を包み込んだ暗闇。

真っ暗ではなく、月明かり程度の夜を思わせるその空間には、鮮やかな月が浮かんでいた。

ドラゴンはその巨体をみるみるうちに沈めると、やがて眠りに落ちた。あとに残ったのは、静寂のみ。

例年どおりなら、すぐに先生方が事態の收拾を始めることだろう。

「おほほほ、今年の新生、なかなか有望な子がいるみたいね」

満足そうな微笑み浮かべると、彼女はゆったりとした動作で屋上から去っていった。

驚きの入学式から二日後。

あたしたちは驚くほど平穏な日々を過ごしていた。

魔法科専門の学校とはいえ、基礎が大切ということなのか、一年生の授業は、国語やら数学やらの一般科目と、魔法関係でも基礎を学ぶ科目がほとんどだった。

ふにゆく、そういう授業ばかりだと、なんか中学校時代と変わらない気がして、愛美谷学園に入れたんだってという実感が湧かないわ。

ともかく、今日もそんな平穏な一日が終わり、帰りのホームルームの時間となっていた。

「あの、あの、み、みなさん、きよ、今日も一日、お、お疲れ様、でし……た……」

語尾がほとんど聞こえなくなってしまうけど、教壇に立って話をしているあの人が、あたしたちのクラスの担任である倉敷早くしき さとこ先生だ。

去年大学を卒業したばかりの新米先生とはいえ、あまりにも不慣れすぎるのではないかと、このあたしですら思ってしまう。

でも学園長が、「あなたなら大丈夫よー！ 一年生の担任に決定ね！」と言って、問答無用だったみたい。

ほんとに大丈夫なのかな、この先生……。

「あの、その、今日はとくに、れ、連絡事項も、あり、ません……。な、なにか、連絡とか、ある人、います、か……？」

思わず、先生、頑張つて！ と応援の声をかけたくなくなってしまふほど、おどおどした口調でそう言つと、早兔子先生は教室を見回す。その目には、「だ、誰も、連絡なんて、しないで、ください」とでも言いたげに涙が浮かんでいた。

先生は自分の名前がとても気に入っているので早兔子先生と呼んでくださいと、初日からあたしたちをお願いしていた。もちろん、しどろもどろになりながらだったけど。

すでに全クラスメイトからエールの視線が送られている状況の中、どうにかこうにかホームルームは進む。

「そ、それでは、これで、ホームルームを、お、終わりに、します……。き、気をつけて、か、帰つて、くだ、さい……。ね……」

そう言つやいなや、そそくさと教室を出ていこうとする早兔子先生は、教壇のある一段高くなっている場所から下りるときに、盛大に顔面からずっこけた。

「あつうゝ……」

真つ赤になった鼻を押さえて涙目になった顔をちらりとあたしたちのほうに向けると、

「うつつつつうゝゝゝゝ！」

早兔子先生は声にならない声を上げながら、走って出ていってしまつた。

「こんな小さな段差で、しかも顔面から転べるなんて、とっても器用だにゝ」

なんて言っているカリンちゃん。
でも、あたしにはわかる。あたしだって、同じようなことがあるもん。

「まるで、マナみたいね」

的確なツツコミのレイちゃんだった。

「んふ。でも、早鬼子先生って、思わず応援したくなっちゃうよね」
自然とあたしたちの会話に入ってきたのは、セイカちゃんだ。
それ自体はいいのだけど、気になるのは、やっぱり……。

「男のくせに、『んふ』なんて笑い方するなあ……！」

思わず首も締めてしまうつてものだ。

「い……いや、さすがに首はダメなのだよ、マナティ」
「マナティ言っなあ……！」

暴れるあたしを鎮めるのは、レイちゃんの役目だった。

「うふふ、えいっ！」

斜め四十五度から入る、うなじの辺りへの鋭いチョップ。
どうしてレイちゃんは、チョップするとき、あんなに嬉しそうな
のだろう。

なんて冷静に考えられる余裕なんてなく、あたしは痛みでのたう

ち回る。

そんな姿も、この教室ではごく日常的な光景となりつつあった。

さて、何事もなかったかのように、あたしたちは四人一緒に昇降口へ。

こうやって一緒に帰るのも、ありふれた日常になっていた。
女の子三人の中に男の子であるセイカちゃんが混ざっているのに、まったく違和感がないっていうのも、ちょっとどうかと思うけど。

それはともかく、昇降口から校門へと続く、ロータリーになつて
いる広場まで出たあたしたちは、さすがに驚かされた。

そこに、すごくたくさん生徒たちが集まっていたからだ。

「どうやら、部活の勧誘みたいね」

いつもどおり、冷静に状況を分析するレイちゃん。
でもでも……。

「さあ、あなたも一緒に、掘りゴタツについて研究してみませんか
!?!」

「世界中に散らばるマイナーなスポーツに日の目を！ 来たれ、マ
イナースポーツ部！」

「時代は猫！ 猫こそ我らが命！ さあ、猫部へ！」

「美容はやっぱり気になりますよね！？ だったら、ここ！ ダイ
エット部へようこそ！」

「カツゼツが悪いとお嘆きのあなた！ 是非、早口言葉研究部へ！」

なんか、妙に変な部活ばかりな気が……。
くらくら。めまいを覚え始めるあたしたち。
でも、その背後にさらなる変な人が迫っていたなんて。

「やあやあ、お嬢さんたち。部活選びに迷っているようだねえ」

前髪をかき上げながら、軽い感じの声をかけてきたのは、ひとりの男子生徒だった。

「僕は流瀬智騎^{なかせともき}、二年生さ。この僕が、キミたちにピッタリ合った部活を選んであげるよ」

背も結構高めだし、ぱつと見はカッコいいかもしれない。

でも、こんな喋り方をしていたら、絶対に避けられると思う。

それなのに、本人はこれがいいと思って疑わないといったような雰囲気で、ひたすらあたしたちに話しかけてくる。

ふにゆく、こういう人、レイちゃんは嫌いだろうな、なんて思っていたら案の定、

「あなたのような方とお話することなんて、わたくしたちにはありません。すみませんが、通していただけますか？ 正直に申し上げさせていただくと、邪魔です」

レイちゃんは顔色を変えることなく、淡々と言つてのける。

いくら一年生とはいえ、こんな黒髪の美人にそう言われたら、普通の神経をしていたら、なにも言えなくなってしまうと思う。

でも、相手は並の神経の持ち主ではなかったようだ。

「ふつ。そんなに照れなくてもいいじゃないか。でも、キミの美しい笑顔を曇らせてしまうなんて、僕はなんて罪深い男なんだ。お詫びの印といってはなんだけど、僕からキミたち全員にスウィートで

素敵な時間をプレゼントさせてもらっよ」

でもでも、レイちゃんも並の神経の持ち主ではなく。

「雑音の再生は、そろそろ終わりました？　では、失礼」

流瀬先輩の言葉を完全に受け流し、あたしたちを連れて歩き去ろうとする。

「そんなに急がないで、ゆっくり僕と歩いていかないかい？　きつと素晴らしい日々に出会えるはずだよ」

先輩も負けじと追いつがる。

ダッシュで駆け抜けてしまえば早そうだけど、レイちゃんとしては、それも負けた気がして嫌なんだろうな。

「ほら、キミたちからもなにか言ってあげてよ。僕と楽しい時間を過ごしたいだろう？」

どこからそんな自信が湧いてくるのやら。流瀬先輩は避けられていることにまったく気づく気配がない。

いつもうるさいカリンちゃんですら、どうやって対応していいかわからず黙ったまま。

あたしやセイカちゃんに至っては、完全にレイちゃんの背後に隠れて目を合わせないようにしている状態だった。

それなのにこの人は、いったいなんなの？

澄ましてやり過ぎそうと懸念だったレイちゃんのこめかみも、ピクピクし始めている。

ふにゃ、学園長さんみたいにドラゴンになったりはしないと思うけど、さすがのレイちゃんだって怒りが爆発しちゃうかも……。

そんな心配を胸に、でもなにもできないあたしは、ただレイちゃんの陰に隠れて歩くのみ。

もちろんそのあいだも、流瀬先輩は矢継ぎ早に喋りかけてきていた。

「ほら、お嬢さんたち、そろそろ僕とともに過ごすスウィーティーナ学園生活に思いを馳せて、我が部に入部したくなってきただろう？」

いったいいつまで続くのだろう。

……って、あれ？ この人、最初、あたしたちに合った部活を紹介してあげるって言ってなかったっけ？

でも、今の言い方からすると、これって結局、自分の所属している部活への勧誘なの！？

……思いつきり逆効果な気がするけど……。

おそらく、みんなも気づいたのだろう、タイミングを合わせたかのように、ため息を漏らしていた。

と、そんなあたしたちの目の前に、すっと躍り出る影。

「あなたの勧誘じゃダメですわ」

ゲシッ！

明らかに鈍い音がして地面に倒れ伏す流瀬先輩。

ほのかに甘い香りを振りまくその影は、何事もなかったかのようにレイちゃんの目の前に立ち、優雅な仕草でスカートの裾を軽くつ

まみ上げて頭を下げる。

「失礼致しました。私どもは、生徒会執行部です。あなた方四名を、勧誘に伺いました」

ニコツ。

優しいな微笑みを向けるその人の足の下には、ボロ雑巾のような扱いを受ける流瀬先輩が転がっていた。

「え〜っと……」

さすがに声が出ない。だって、生徒会執行部だなんて。

「部活じゃないじゃない」

冷静にレイちゃんが突っ込む。

「ノンノン。生徒会執行部……ほら、『部』とついてますでしょっ?」

さも当たり前のようにそうのたまう女性。

「ご挨拶がまだでしたわ。私は生徒会長の鶯うぐいすまゆみ繭魅です。よろしくお願ひしますね」

ニコツ。

再び笑顔を浮かべる会長さん。

「うにゅ。でも、生徒会なんて無理です。責任感とか、実力とか……」

さすがに驚いたけど、生徒会なんて新入生で右も左もわからないあたしたちに務まるはずがない。

しかも特殊な魔法科専門の学校の生徒会なんて。

「奥ゆかしいその態度も微笑ましくていいですね。わかりました。今日のところはご挨拶だけにしておきます」

ニヤツ。

さっきまでの爽やかな笑顔から、イタズラっぽい顔に変わる会長さん。

「でも、あなた方は生徒会に入ることになるわ。覚えておくことね。おーっほっほっほ」

そんな悪役じみた笑い声を残しつつ、黒いマントをひるがえして去っていった。

……ボロ雑巾……いえ、流瀬先輩を引きずりながら。

「……とりあえず、帰りましょうか……」

啞然としながらもどうにか発せられたレイちゃんの言葉に、あたしたちは黙って頷くことしかできなかった。

「昨日は大変だったに」

翌日、あたしたちは朝のホームルーム前に集まって、いつもどおりのお喋りに興じていた。

もちろん話題は昨日のこと。

「うん……。でも、生徒会長さん、ボクたちが生徒会に入るって言いきってたよね……」

セイカちゃんがおどおどしながら言う。

朝は低血圧だからおどおどしてしまう体質なのだろうと、あたしは勝手に結論づけている。

「それにしても、とても目障りな物体がうごめいていましたわよね」
「ふにゅ、仮にも先輩に向かって、目障りな物体なんて……」

レイちゃんのちよつとひどい言い方に、さすがのあたしもフォロイを入れようとしたのだけど、

「あんなの、物体で充分よ。存在を認めているだけ、ありがたいと思ってもらいたいものだわ」

ブラック・レイちゃん、絶賛降臨中みたい。

「そろそろ早兎子先生が来る頃だに」。仕方ない、席に着くのだ」
「そっだね」

そそくさと自分たちの席へと散らばる面々。散らばるといっても、みんなすぐ近くの席なのだけど。

トタトタトタ。

廊下を走ってくる音が近づく。先生なのに廊下を走るなんて。

そんなことを考えている時間すらなく、早兎子先生は教室に飛び込んできた。

その顔は、驚きと焦りと涙でいっぱいだった。

「あ、あの、あの、みなさん、た、大変、です……っ！ えっと、えっと、ウサギが、セミの、大行進で……っ！」

なにが言いたいのかまったくわからない先生の言葉が終わるよりも早く、その音はあたしたちの耳に届いた。

ジージージー。

ツクツクホーシツクツクホーシ。

ミンミンミンミンミン。

暑苦しい鳴き声が響き渡る。

「うにゃ〜、な、なに!？」

「どう考えてもセミなのだに〜」

「でも、まだそんな時期じゃないのに……」

「きつと魔法実験で失敗して逃げ出したとか、そういうことなんじゃないかしら。お姉様もよく、失敗しちゃいました、てへ　とか言ってごまかしていたみたいよ」

……レイちゃんの発言は、セミの鳴き声でよく聞こえなかった、

ということにしておこう。

と、教室に突然なにかが飛び込んできた。それは――。

「わぁ、可愛い」

淡いピンク色のウサギだった。

クラスのほとんどが女子という魔法科の教室に、こんな可愛いウサギが飛び込んだらどうなるか。

そりゃあもう、我先にと飛び出し、その可愛いもこもこふさふさを抱きしめる。

教室には、次々と、そのピンクのウサギが飛び込んできていた。

「これ、私の」

「じゃあ、私はこっち」

可愛い乱入者に、少し感覚が麻痺してしまっていたからか、ついさっきまでの鳴き声のことを忘れていた。

と――。

ジージージー。

ツクツクホーシツクツクホーシ。

ミンミンミンミンミン。

いきなり大音量が鳴り響く。

クラスメイトたちが抱きしめているピンクのウサギから。

どうやらこのセミの声のような音は、ピンクウサギの鳴き声のようだ。

「きゃあ~~~~~」

鳴き声を上げる姿が愛らしいからか、女子生徒たちの悲鳴にも微妙に余裕があるように思えたのは、あたしの気のせいだろうか。

それはともかく、耳をつんざくようなその音の反響の中、あたしたちにできることといったら、耳を塞ぐことくらいしかなかった。

こんな状態じゃ、授業なんてできるはずもない。

それどころか、あまりの騒音に具合まで悪くなったのか、倒れ込んでいるクラスメイトもちらほらと……。

うにゅ、これって、ほんとにヤバい状態なんじゃない？

よく見れば早兔子先生まで、教壇にもたれかかって今にも倒れそうな状態だった。

「せ、先生！ 大丈夫ですか!？」

あたしは先生のもとへ向かう。それに続くカリンちゃん、レイちゃん、セイカちゃん。

「ど、どうやら、動けるのは、あ、あなたたち、四人だけです、ね……、この事態を、どうにかして、ください……、お願い、しま、す……」

どうにかしてって言われても……。

そうは思っただけど、早兔子先生、泣いて頼んでるし。

あたしたちは意を決して、教室をあとにした。

廊下に出ると、そこはウサギのサーキットだった。

そう思ってしまうほど、たくさんのウサギたちが駆け抜ける。

教室内で最初に見たときは、普通に可愛いウサギだと思ったけど、さすがにこれだけの大群が押し寄せてくると、脅威でしかない。

「ふにゅ、こんなの、どうすればいいんだろう？」

「廊下を歩くだけでも危険だし」

「ボク、もう帰りたい……」

「なに情けないこと言ってるのよ。ほら、行くわよ！」

ふみゅ、こういうときのレイちゃんは、とっても活き活きしている。

こんな状況をも楽しんでいるみたい。

「でも、ウサギが……」

さすがにウサギの流れに逆らって突撃する勇気はなく、あたしたちの足は止まったまま。

「ウサギだってバカじゃないわ。いくら走っていたって、障害物が目の前に現れたら避けるわよ、こんなふうだね」

ずっと優雅に黒髪を揺らめかせ廊下の真ん中に立つレイちゃん。

ドドドドドドドドドカバキグシャ。

……ご想像どおりというかなんというか。

ウサギたちが通過したあとには、思いっきりぶつかられて廊下に仰向けに倒れ、その上をウサギたちが駆け抜け、無数の足跡がくつきりとついたレイちゃんだけが残されていた。

合掌。

「だ……大丈夫？」

セイカちゃんが心配そうに声をかける。

あたしとカリンちゃんは、いつものことだし、まったく心配なんてしていなかったのだけど。

レイちゃんってば、頑丈にできているみたいで、なにがあってもすぐに復活するのだ。

「ふふふ、ほんのちよつとだけ、失敗してしまったわね」

案の定、すぐ立ち上がったレイちゃんの言葉に、セイカちゃんはなにか言いたそうな視線を向けていたけど、余計なことはいわないほうが賢明だと察したようだ。

「とりあえず、ウサギの流れも収まってきたみたいだに」

「素直に少し待つてればよかったね。そうすれば、レイちゃんも踏まれずに済んだのに」

「ふふふ、わたくしはべつに大丈夫だったのよ？ さ、そろそろ行きましょう」

すたすたと歩き出すレイちゃんのとに、あたしたちも続く。

レイちゃんの足取りはいつもどおりの軽やかさだった。やっぱり復活するの、早いなあ。

「それで、先導して歩いてるけども、どこに行くつもりなのかに？」
「それはもちろん、音が大きいほうに向かうのよ。元凶となってる場所に一番多く集まってると思うのが妥当でしょ？」

あのセミの声のような音は、今も続いていた。
そして明らかに大量の鳴き声が、特別教室棟のほうから響いてくる。

さっきのウサギたちが走ってきた方向とも一致するから、それは正しいのだろう。

でも、でも……。

あれだけの大量のウサギよりも、さらに多くのウサギ？
そんなの、いったいどこに集まることができるっていうの？

「確かに大量に集まるだけなら、体育館が校庭だと思うのだけれど、音は確実にこっちから響いているわけだしね」

あたしの考えてることが読めたのだろう、レイちゃんが解説を入れてくれる。

「魔法が絡んでる可能性が高いから、常識なんて通用しないと思っただほうがいいわ」

「それはそうだに。学校内に大量のウサギが溢れてセミの声で鳴いてる時点で、異常なのは確かなのだ」

そんなこんなで、あたしたちは音のするほうへと向かってみた。
そこは――。

「ここ……だよ……」

「そうだに」

「ふにゅー、ここって……」

「ま、予想どおりだわ」

ドアの上に取りつけられたネームプレートに書かれた文字は、生徒会室、だった。

開け放たれた生徒会室のドアから中をのぞき込むと、そこには、大量のウサギと、穴があった。

穴……。

真っ黒な、見るからに異世界とか異空間とかにつながっていそうなその穴から、ぴよこつ、ぴよこつと、次から次へ、ウサギが飛び出してきた。

「ふにゃ、な、なによ、これ？」

「見たままって感じだけど、異空間につながってるわね」

「ふむ、どうすればいいのかに」

「それよりも、ウサギがこつちを睨んでるよ……？」

そうやってレイちゃんの陰に隠れるセイカちゃん。

完全にレイちゃんを盾にする習慣が根づいてしまっているみたいだ。

ともかく、セイカちゃんの言うとおり、今はこつちを睨んで、じりじりと迫りくるウサギのほうをどうにかしないと……。

でも、このウサギって、いったいなんなの？

「きっと、ウサギだらけの世界とつながってしまっているのだに」

カリンちゃんが無責任な発言を投げる。

それにしても、このウサギ、どうして鳴き声がセミなんだろっ……。

ほんとに異世界の住人で、そういう生き物なのかなあ？
それに、ウサギってことにも、なんかちょっと引っかかっている
感じなのけど……。

珍しくいろいろと考えを巡らせる。

ふにゅ、思考回路がショート寸前だわつ。煙が出そう。

「いやいや、出ないから」

カリンちゃんがすかさずツツコミを入れてくる。いつもながら、
あたしの思考は筒抜けだわ。

と、そんな余裕をかましている場合じゃなかった。

「やゝん、どうしょ」

セイカちゃんは涙目でレイちゃんにしがみついている。

もう、男としてのプライドなんて、ひとかけらたりとも残ってな
いのだろうか。

とりあえずセイカちゃんの特訓の儀式はまた、改めて執り行つと
して。

「はう、マナさん、儀式とか、変なこと考えてるような目をしてる
……」

セイカちゃんにまで、あたしの考えてることは丸わかりのようだ
った。なんでだろ……。

と、そんな場合じゃないんだってば！

今にも飛びかかってきそうな表情で、ウサギたちはあたしたちを
取り囲んでいた。

「ふふふ、わたくしたちは魔法使いなんだって、入学式でも言ったでしょう?」

まったく慌てた様子もなく、レイちゃんはあたしたちに問いかける。

そして、

「このウサギたちも、魔法で呼び出されたもの。だから、わたくしたちの魔法で対処可能ってことよ」

自信満々に言い放つ。

ふにゃ、カッコいいよ。

でもでも、魔法だって、力の強い弱いってのがあるんだし、魔法だから対処可能だってことにはならないと思うけど……。

「弱気は負の空気を呼び込むわ。強気に元気に洗濯機よ!」

いや、最後のは意味わからないし……。

でも、確かに気の持ちようってのは大切かもしれない。

どうにもならないことだってあるような気もするけど、この際その辺りは空の彼方にポイしておく。

ともかく今は、このウサギたちをどうにかするのが先決だ。

あたしたちにできることといったら、それぞれが得意な属性の魔法だけ。

花魔法のあたし、鳥魔法のカリンちゃん、月魔法のレイちゃん、風魔法のセイカちゃん。

この四人が集まれば、なんだってできるはず!

……ほんとかな……?

とにかく、考える、考える、考える、考える、考える、ぷしゅ〜。

「マナっち、けむりけむり！」

「ふにゅ〜」

「ふふ、考えるのはわたくしに任せなさい」

すつと構えを取るレイちゃん。

それを合図にしたかのように、飛びかかってくるウサギたち。

「セイカ、風！」

「は……はいっ！」

セイカちゃんの魔法で、風が舞い起こる。

ウサギたちはまるでぬいぐるみのように、あっさりと風に舞い踊らされる。

「えい！」

レイちゃんの魔法で、生徒会室の中に大きな月が浮かぶ。
異空間とつながる穴が、月のように輝き出したのだ。

「カリン、羽根！ 月へ！」

「ラジャーだに！」

カリンちゃんの魔法で、ウサギに羽根が生える。

その羽根が風を受けることで、ウサギたちは月のように変わった穴へと誘導され、その月の表面に次々と張りついていく。

「マナ、花！」

「うにゅっ！」

あたしの魔法で、ウサギたちの頭に花を咲かせる。
心を安らかにさせる花の香りは、ウサギたちの心も静めた。

「フィニッシュ！」

そして、レイちゃんの作り出した月は、その大きさを一気に縮める。

表面にわらわらと張りついたウサギたちとともに。

月が収縮し、見えなくなると、そこにはもうなにも残ってはいなかった。

ただ散らかった生徒会室の姿だけが、あたしたちの目の前に広がっていた。

パチパチパチパチ！

突然、拍手の音が鳴り響く。

「ふにゃ？」

振り返ると、生徒会室の周りには、大勢の生徒たちが集まっていた。

その人垣の中から、一歩前に出てきたのは、生徒会長さんだった。

「お疲れ様でした」

そのあとに続いて、さらにふたりの生徒が一歩前に出てくる。

「やあやあ、やはりキミたちは僕が見込んだだけあって、パーフェクトでグレイトでビューティフルな活躍をしてくれたね！」

片方は、あの流瀬先輩だった。

その横では、眼鏡をかけた地味な印象すら受ける女子生徒が、軽くあたしたちに会釈をしていた。

「これはいつたい、どういうことなのかに？」

どうなっているのかわからずあわあわしているあたしとセイカちゃんを押しのけて、カリンちゃんが前に歩み出ると、髪留めに結んだ鈴をチリンと鳴らしながら会長さんを問い詰める。

「おほほほほ、せっかちさんですね」

カリンちゃんの勢いにもまったく動じることなく、こほん、と微かに咳払いをして、会長さんは話し始めた。

「……あなた方のおかげで、今回の事態は治まりました。生徒のみなさんも、あなた方に感謝していますよ」

「うん、ありがとう！」

「あなたたちがいなかったら、いったいどうなっていたことか！」

「感謝してもきれないわ！」

「あなたたちは、全校生徒の希望よ！」

会長さんの言葉に促されるように、後ろに並んでいた生徒たちが口々に賛美の言葉をかけてくる。

「ほらね。ですから、あなた方に実力がなくて、責任感がないとか、そんなことはないのですよ。生徒会執行部としても、是非とも必要なメンバーですわ」

真剣な眼差しをあたしたちに向けて、会長さんはひと呼吸置く。そして、こう続けた。

「改めてお願い致します。生徒会執行部に、入ってくださいませ」

わあ、こんなに期待されてるんだ、これは入部するしかない！……なんて、いくら鈍いあたしでも、さすがに言わないわよ。

これってつまり、あたしたちを入部させるために、あの会長さんがこんな大がかりな茶番劇を仕組んだ、ってことだよね？

セイカちゃんだけは本気で信じているみたいで、「わかりました」と言いそうな目をしていただけ、すかさず背後に立ったレイちゃん

がお尻に鋭い蹴りを入れて止めていた。

涙とハテナマークを浮かべたセイカちゃんは、ちよつとかわいそうだったけど。レイちゃん、相変わらず容赦ないわ。

「そのために、わざわざこんなことを仕組んだのかに？」

怒りの表情を浮かべたカリンちゃんの声にも、会長さんは平然と澄まし顔。

「あらあら、バレてしまいましたか。でも、あなた方の力が生徒会執行部にふさわしいということは、これで証明されたのよ？」

「……目的のためには手段は選ばないというのね。でも、この学校の生徒たちにもですけれど、ウサギたちにも悪いと思いませんか？魔法で勝手に呼び出したのでしょうか？」

レイちゃんも鋭い目つきで冷めた声を放つ。

「あのウサギたちは、先生のお飼いになられているウサギですね？ 早兔子先生」

「う、う、あの、その、ご、ごめんな、さい、です……」

会長さんの声に促されて、早兔子先生が生徒たちをかき分け、泣きながら前に出る。

その顔はもう、涙でぐしゃぐしゃだった。

「わ、私、生徒会、執行部の、顧問を、して、いるん、です……ぐすつ。それで、マユさんに、言われて、飼育してる、ウサギたちを、ぐすつ、使いました、ごめんなさい……」

マユさんというのは、鶯繭魅さん、つまり会長さんのことだ。

でも、目的のためには、先生をも使うんだ……。

そっか、そういえば早兎子先生の得意な属性って、兎魔法だって言ってたわ。さっき引つかかっていたのは、このことだったんだ。

「あなたたちが、入部して、くれないと、私、困ります……ぐすっ」

ふにゅ、困りますって言われても。

こっちも困っていると、さらなる非情な声が響く。

「あらあら、こんないたいけな先生を泣かせるなんて、あなた方はなんてひどいのでしょうか。罪滅ぼしとして、先生をお願いを聞いてあげるのが筋ではないかしら？ 生徒会執行部への入部というお願いを」

むにゅ、ひどいのは会長さんのほうじゃ……。

そんな反論をぶつけられる勇氣なんて、あたしにはなかった。

早兎子先生、本気で泣いてるし。仕方ない、よね……？

あたしは、ちらつとレイちゃんに視線を向ける。

苦笑を浮かべて首をすくめる仕草を返すレイちゃん。

「……わかりました。わたくしたち四名、生徒会執行部に入部させていただきます」

すっかり諦め顔で、そうきっぱりと宣言するレイちゃんの声を聞くと、会長さんは満足そうに頷いていた。

「おほほほ、ありがとございます」

満面の笑みを浮かべる会長さん。

そのとき、おずおずと声をかけたのは、背後にいた生徒のひとりだった。

「あの……私たちは、これで……」

「あら、あなたたちも、ありがとございました。もう帰っていたいて結構ですわよ。バイト代はミナミさんから受け取ってくださいね」

え？　今、バイト代って言った？

会長さんの背後に並んでいた生徒たちは、ミナミさんと呼ばれた、さつき流瀬先輩の横にいた眼鏡の地味な感じの人からお金（どうやら、ひとり千円らしい）を受け取ると、蜘蛛の子を散らすように去っていく。

残ったのは、あたしたち四人を除けば、会長さんと流瀬先輩、ミナミさん、まだ泣いてる早兔子先生だけだった。

「私たち生徒会執行部一同、総勢三名。あなた方を心から歓迎しますわ！」

さ、三名！？　ちょっと少なすぎじゃない？　新入生のあたしたちのほうが多いじゃないの！

「あと、オマケの顧問、早兔子先生もね！」

「お、オマケ、じゃ、ない、もん……」

早兔子先生、ちょっとかわいそう。

あたしたち、とんでもない部に入ってしまったんじゃない……。

「後悔しても、もう遅いわよ。きっと、会長さんに目をつけられて

しまった時点で、運命は決まっていたのね」

レイちゃんが、すっかり観念したように、力なくつぶやいていた。

ちなみに。

生徒会執行部に入って最初の活動は、学園中に散らばったウサギの捕獲、だった。

そういえば、なぜウサギの鳴き声がセミの声だったのかというと、会長さんいわく、「夏が好きだから」だそうだ。

全然理由になってないような……。

でも、あの会長さんだしなあ。なんとなく納得してしまう。

それはともかく……。

どうしてあたしたちが、会長さんのでかしたことの後始末をしなきゃならないの……!?

「ごめんなさいね。あんな人だけど、この学園を愛する気持ちは誰にも負けないのよ。だからミナミは、会長さんについていくの」

不満を抱えるあたしに、眼鏡の二年生、ミナミ先輩が優しくな声でそう話しかけてくれた。

南部みなへという名字だから、ミナミ、なのだという。どういうわけか、下の名前は教えてくれなかったけど。

でも、ミナミ先輩と話していて、あたしの胸に浮かんだのは、ただひとつ。

よかった、まともそうな人がいてくれて、という安堵感だった。

清々しい青空が、あたしたちを包み込むかのように広がっていた。ふにゃ〜！ とつても遠足日和だわぁ〜！

というわけで、あたしたちは遠足に来ていた。もちろん、学園の行事だ。

遠足だなんて、小学校みたいだけど。

でも、高校生になったあたしたちでも、やっぱりわくわくしてしまふ。

「きつと、親睦を深めるって意味もあるんだろうに〜」

カリンちゃんもリュックサックを背負って満足そうな笑顔。

昨日一緒におやつも買いに行った。

もちろんおやつは、三百円まで。バナナはおやつに含まない。遠足の基本だよな。

「歩くのは、疲れるけど、でも、こういうのって、すごく楽しいよね！」

セイカちゃんも、すでに息は少し上がっていたものの、普段よりもテンションが高まっているみたいで、結構よく喋る。

「ふふ、三人とも、嬉しそうね」

レイちゃんは大人びた笑顔を浮かべていたけど、彼女が背負っているリュックサックはパンパンに膨れ上がり、気合いが入りまくっているのを如実に示していた。

おやつは三百円までだけど、お弁当に制限はないわ、なんて言っていたから、すごく豪華なお弁当が飛び出すんだろぅな。

あたしまで、わくわくしちゃう。おかず、少しもらおう。

「み、みなさん、ちゃんと、列に、なつて、気をつけて、歩いて、ください、ね……」

早兔子先生が、相変わらずの震えた声で注意を促すけど、声が小さいので、テンションの上がっている生徒たちには全然聞こえていないようだった。

「こら、お前ら〜！ 早兔子先生の言うこと、ちゃんと聞け〜」

早兔子先生をフォローするように、養護教諭の鬼灯雷鳴先生が声を張り上げる。
ほおずきい

凜とした声質と、そのサバサバとした物言いで、雷鳴先生の言葉は生徒の耳にも届きやすい。

「うふふ〜、そうですよ〜、みなさん。遠足ではしゃぎたい気持ちもわかりますけれど、我が愛美谷学園の生徒として恥ずかしくないよう、節度を持った行動を心がけてくださいね〜。担任の指示に従わない生徒なんて言語道断ですわ〜。言語道断といえば、どうして道を断つて書くか、わかりますか〜？ そもそもこの言葉はですね〜……」

そして学園長さんが、またいろいろと話し出す。
ふにゅ〜、長つたらしいお話はもういいですってば。

時間は少しさかのぼって、今朝。

学園の校庭に集まったあたしたち一年生は、学園長さんからのお話（もちろん長かった）のあと、クラスごとに担任の先導で移動を開始した。

月組が校庭の一番奥に並んでいたため、日組から順に出発し、あたしたちの組は一番最後。

あたしたちが移動し始めると、なぜか学園長さんまでついてきた。お話するただけに集合場所にいたわけではなかったのだ。

「だって、遠足ですよ？ わたくしだって一緒に楽しみたいのですわ。そうそう遠足といえは……」

「はいはい、お話はいいから、足を動かしましょう、学園長」

いつの間に列に加わったのか、学園長さんに注意を促した雷鳴先生も、あたしたちと一緒に歩いていた。

「あたしも学園長と同じで、遠足を楽しみたいのさ」

素直に答えた雷鳴先生。

「……それに、あたいの力が必要になるはずだしね。ふふっ」

ぼそりと、そんな言葉をつけ加えたように聞こえたのは、あたしの気のせいだったのだろうか。

やがて。

「つ、着きました。た。ここが、遠足の、目的地、です……」

早兎子先生が立ち止まって、小さくそう宣言する。

そこは、学園の裏山だった。

「近づい！」

思わず生徒たちからツツコミが入る。うん、まあ、当然の反応だよな。

「これじゃ、遠足じゃなくて短足だわ！」

……レイちゃん、そのツツコミは間違ってると思う……。

でも確かに、遠足の行事案内には目的地なんて書かれていなかった。だからちよつと、怪しいなあ、とは思っていたのだけど。

それにしたって、裏山だなんて……。

歩いて五分とかかかっていない。

それでも息が上がってるセイカちゃんには、体力づくりの特訓を追加しなきゃならなそうだわ。

「ここは、学園所有の山なんですよ。大自然の中でのびのびと、思う存分魔法を使ってもらえるようにと思って、用意してある場所なんです。今日はここで、思う存分、魔法を使ってくださいね。うふふ。遠足というより、魔法訓練、という感じかもしれません」

ね」

相変わらずの、のほほんとした笑顔を浮かべながら、学園長さんはきっぱりそう言った。

ふにゅ。でも、それならそうと最初から案内に書いておけばいいのに。

「トラブルは突然襲いかかってくるものなのですわ。油断しているときにこそ、しっかりと対処できるように、というのが今回の遠足の目的でもありますのよ」

……すでに遠足じゃありません……。
そんなツツコミも、ただ空しいだけだった。

「それでは改めて今回の趣旨を伝えるぞ」

全クラスの生徒が裏山の前に集まったのを確認すると、雷鳴先生が話し始めた。

もちろん最初は学園長さんが話そうとしていたのだけど、「今日は本当にいい陽気ですね。陽気といえば……」と、いきなり脱線し始めたところを雷鳴先生が無理矢理押しのけ、話を引き継いだのだ。

学園長さん、いじけてるけど……。

「お前たちには四〇五人でグループを組んで山に入ってもらおう。あらかじめ学園側で、この山のどこかに、『あるもの』を隠しておいた。それを見つげるんだ。持ち帰ってくることができれば、ご褒美があるぞ」

「あるものって、なんですか」

生徒から質問が飛ぶ。

「ヒントはなしだ。ただ、ヒントを書いた立て札を山の中に立ててある。それを参考にしてくれ」

わざわざ、そんなものまで用意してあるんだ。
実は結構気合いの入った行事なのかも。

「んふ、宝探しみたいで、楽しいね」

セイカちゃんは喜びが溢れ出しているような笑顔をこぼしている。

そこへ、あたしはすかさずツッコミを入れた。

「『んふ』って笑うな！」

「きゃん！ ごめんなさい……」

一応、セイカちゃんを男っぽくしよう作戦は続いているのだ。
…まったく成果は上がっていないのだけど。

「でも、これのどこが魔法訓練なのかに？」

カリンちゃんが首をかしげている。

「きつと、魔法を使って探せってことなんでしょ。ふふ、腕が鳴るわ」

レイちゃんは、ポキポキと指を鳴らしていた。

「ま、あたいたちはここで待ってるからな。お前ら、頑張っ
ていよ」

「み、みなさん、き、気を、つけて、無事に、帰ってきて、くだ
さい、ね……」

「いつてらっしゃいます。ませといえ、ませるといのは、老
成ると書きまして……」

投げやりな物言いの雷鳴先生、おどおど喋りの早兔子先生、意気
揚々と長話を始めた学園長さんを残して、あたしたちは山の中へと
入っていった。

「らんらんらんらん♪」

ご機嫌に鼻歌まで歌い始めたセイカちゃん。カリンちゃんも綺麗な声でその歌に合わせている。

実は魔法訓練だ、なんて言われて最初はちょっと身構えていたけど、もうすっかりハイキング気分だった。

ふにゃ〜。あたしも思わず笑顔になってしまふ。

山に入るともちろん上り坂になって歩くのはちょっと大変だったけど。

でも、周りの木々もそれほどうっそうと茂っているわけではなく、色とりどりの草花で溢れていて、清々しい雰囲気。

それだけじゃなくて、可愛い小動物が顔を出したり、綺麗な小鳥のさえずりが聞こえたり……。

暖かな今日の陽気と相まって、本当に気持ちがいい。

「ふふふ、こういうのもたまにはいいわね」

レイちゃんすらも、素直に楽しんでいる様子だった。

と、目の前に一本の立て札が。

「あつ、これが先生の言ってたヒントかな？」

あたしは回り込んで、立て札に書かれた文字を読んでみた。

「ば・く・は・つ・ちゅ・う・い？」

ドカーーーーーン！

突然立て札は爆発した。

「けほっ、けほっ！ ふにゅ、なによこれえ？」

「ふふ、ハズレのヒントもあるってことかしらね？」

あたしたちは、煙にむせ返りながら、爆発で折れ曲がり、焼け焦げてしまった立て札を見つめる。

爆発の規模自体はすごく小さなもので、大げさな煙幕と爆竹かなにかを使った音で驚かせる仕掛けだったようだ。

「うえ~~~~ん、目が開けられないよぉ。けほけほけほ」

運悪く煙がまともに目や気管に入ってしまったのか、セイカちゃんは涙を大量に流しながら激しく咳き込んでいたけど。

「ひゃうつ！？」

悲鳴を上げてセイカちゃんがズデンと滑って転ぶ。

「いや〜ん、ズデンなんて重い音、してないよ〜」

セイカちゃんがあたしの心の声に文句を言う。

どうしても、あたしの思ったことは筒抜けになっちゃおうようだ。

「セイカっちは、基本的に不幸を呼び込む體質みたいだに〜。さっきから、仕掛けに引っかかるのは、セイカっちはっかりなのだ」

確かに、危険なものではないとはいえ、さつきからたくさんのお仕掛けに遭遇していた。

そして、まっ先にその仕掛けの餌食となるのは、必ずセイカちゃんだった。

「ううう。べつに先頭を歩いてるわけじゃないのに……」

「うふふ、カリンは体質って言ったけれど、実際にそういうのはあるのよ。体質とはちよつと違つかもしれないけれど、魔法属性の影響かもしれないわね」

泣きべそをかくセイカちゃんに、レイちゃんが追い討ちをかけるように解説を加える。

「セイカは風属性だから。風って『ふう』とも読むでしょ？ 風を受ける、って言い方もあるわよね？ だから、風を受ける↓ふうを受ける↓ふうを受ける↓不運を受ける、って感じになるのよ」

ちよつと、お得意のオヤジギャグっぽくも思えるけど、言霊って言葉もあるし、確かにそうなのかも。

「運命だと思つて諦めることね」

「うえ~~~~ん」

さらに泣き声が大きくなるセイカちゃんの様子を見て、レイちゃんはニタニタ笑っていた。

あつ、やつぱりレイちゃん、からかつてるだけみたいだわ。

「でも、レイちゃんにからかわれるのも、セイカちゃんが可愛いすぎるからなのだし」

なんて言いながら、カリンちゃんも笑っていた。
うん、そうだね、あたしもそう思うよ。
だから、

『運命だと思って諦めてもらおう』

あたしとカリンちゃんの声は、綺麗にハモった。

「……おかしいわね……」

しばらく山道を進んだあと、レイちゃんがつぶやいた。

「ふにゅ、レイちゃん、どうしたの？」

「さっきの火の玉……茂みの中から飛んできたわ」

確かに、ついさっきあたしたちに襲いかかってきた火の玉は、茂みの中から飛び出してきて、セイカちゃんに直撃した。

「燃え移ったら危ないのに、どうして火の玉の仕掛けなんて使うのか、ってことに？」

「いいえ。あの火の玉は燃え移ったりしないように魔法処理されたもの。だから、直撃を受けたセイカも、無傷だったでしょう？」

「う……うん……」

レイちゃんの言葉に、仕掛けの被害を受けまくって沈んだ表情になってるセイカちゃんが、力なく頷く。

「熱さと光で驚かすのが目的なのよ」

「ふにゅ。だったら、いったいなにがおかしいの？」

「勿体つけてないで、早く教えるのだ」

「あのね。燃え移ったりしない魔法処理って、実際に燃え上がった炎に直接かけないとダメなのよ。しかも、それほど長い時間効果が続くわけじゃない。だから、あの火の玉は、わたくしたち目がけて飛んでくる直前に発生した炎ってことになるわ」

ここまではいいいわね？　と確認するように、レイちゃんはあたしたち三人に視線を巡らせる。
黙って頷くあたしたち。

「炎を発生させる仕掛けは作れるでしょうし、それをこちらに向かつて飛ばすことも可能だわ。でも、魔法処理を仕掛けで施すというわけにはいかないの。実際にそばにいて魔法を唱える術者がいないと。つまり……」

「近くに魔法を使える人がいるってこと……？」

遠慮がちに片手を上げて言ったのは、セイカちゃんだった。

「そのとおりよ」

ふにゃ、そうなんだ。

あれ？　でも、そうすると……。

「今この瞬間も、誰かが近くにいて、こっちを見てるってこと？」

「〴〵名答」

ザザッ。

突然茂みの中からふたつの人影が飛び出してきた。

「ミナミ先輩と流瀬先輩！？」

そう、目の前に飛び出してきたのは、生徒会執行部の二年生ふたりだったのだ。

「くすくす」

ミナミ先輩は微かに笑い声を上げながら、こちらに視線を向けている。

その横から一步前に出て、

「そうさ。それにしても、よく気づいたね、お嬢さんたち。やっぱり僕が見込んだだけのことはあるってことかな」

前髪をかき上げながら、流瀬先輩が満足げな笑みを浮かべていた。

「ちょっと智騎は黙ってて」

すかさず一喝するミナミ先輩の声で、流瀬先輩はしぶしぶながらも口をつぐんだ。

「くすくす。どうしてミナミたちがここにいるのかわからない、って顔してるわね」

あたしたちを見回すミナミ先輩。

「ふにゅ、わからないです、説明お願いします」

「OK。あなたたち、今日は遠足ってことでここに来て、実は魔法訓練だと聞かされたでしょ？ それ、一年生の恒例行事なのよ」

ということとは、先輩たちも去年ここで遠足という名の魔法訓練をしたんだ。

「でね、二年生はその一年生たちを迎え撃つ役目を与えられるの」

え？ え？ 迎え撃つ！？

「つまり、一年生対二年生の戦いなよ、これは」
「た、戦い……ですか……？」

怯えた視線を先輩たちに向けながら、セイカちゃんが口を開く。

「そうよ。でもそんなに身構えなくてもいいわ。今ここでは、ミナたちは手を出さないから」

「どうしてそう言い入れるのかしら？」

レイちゃんが様子をうかがいながら、冷静にツツコミを入れる。

「くすくす、慎重ね。安心して、ここはミナミたちの管轄じゃないの。ちょっと様子を見にただだから。いろいろと教えてあげるのは、ミナミの気まぐれだけど、そうね、あなたたちを狙う存在に気づいたことへのご褒美、ということにしておくわ」

微笑みを浮かべながら優しい口調で話してくれるミナミ先輩だったけど、突然真面目な顔になって、こう続けた。

「でも、油断はしないことね。二年生にとっては、一年間学んできたことを発揮して実力を証明しなければならない、重要な行事なの。こちらの管轄する範囲に侵入してきたら、本気であなたたちを排除するからね」

ふにゅ。ミナミ先輩の鋭い視線は、静かだけど、内に秘めた部分が見えない感じで、余計に怖い気がするよ。

「そういつわけだから、ケガ人が出ることもある。それで、養護教諭の雷鳴先生もついてきてるのよ。もちろん、ミナミたち二年生もなるべくケガはさせないように気を遣いながら相手をするんだけど

ね」

「なるほど。なんかもう、言葉も出ないに。さすがにこの学校は、普通の学校とはひと味もふた味も違うのだ」

違いすぎるよ……。

入学してまだ長くないのに、愛美谷学園のすごさが次から次へと
って感じで伝わってくる。

「はっはっは。この先も、さらに驚くべきことがあると
思うよ、心しておくんだね。あまりに驚きすぎて不安になったら、
いつでも僕の胸に飛び込んでくれていいからね、お嬢さん
ち！」

ゲシッ！

ミナミ先輩の一蹴で沈黙する流瀬先輩。その場に突っ伏してしま
った。

「黙っててと言ったでしょ？」

うわあ、さすがにちょっと今のは痛そうだったよ……。

「くすくす。それでは、ミナミたちはそろそろ管轄場所に戻ることに
するわ。あなたたち、せいぜい頑張つてね。……死なない程度に
くすくすくす……」

不敵な笑みを残しミナミ先輩は去っていった。

崩れ落ちたままだった流瀬先輩の首根っこをつかんで、ずるずる
と引きずりながら――。

ミナミ先輩たちが去ったあとも、あたしたちには様々な仕掛けが襲いかかってきた。

「どうして、ボクだけ、こんなにびしょびしょで、泥んこになっているんだろ……」

うるうるしながら、納得のいかない表情を浮かべているセイカちゃん。

でも、それは――、

「運命だよ」「運命だに」

あたしとカリンちゃんの声が、綺麗に重なった。

「うっうっうっ……」

「ま、セイカいじりは、それくらいにして、ちよつと状況を整理しましょうか」

必死に涙をこらえるセイカちゃんを尻目に、レイちゃんが仕切り始める。

仕切りモードのレイちゃんに齒向かうのは、ある意味、死を意味する。あたしもカリンちゃんも、黙ってレイちゃんの言葉が紡がれるのを待った。

「さつきから、わたくしたちを足止めする動きが激しくなっているわ。ということは……」

「目的の『あるもの』が近い、ということだに？」

カリンちゃんの言葉に満足そうな顔で頷くレイちゃん。

「そのとおり。茂みの奥で先輩方が慌てて動き回ってる音が聞こえるでしょ？」

ガサガサガサ……。

レイちゃんの声でさらに慌ててしまったのか、確かに茂みの奥からは、確かになにやら物音が響いてきていた。

「それにほら、立て札もあるしね」

レイちゃんの綺麗な指が示す先には、その言葉どおり、立て札がたたずんでいた。

すかさずカリンちゃんが立て札の前に出て、書かれている内容を読み上げる。

「えーっと、『この先、目的地』だって」

「ふにゅ、すでにヒントどころじゃないよぉ」

「んふ、でも、もう少ししてことだよね」

「ええ。さあ、行くわよ、みんな！」

あたしたちは、レイちゃんに続いて走り出した。

「よくここまでたどり着いたね。ブラボーだよ、お嬢さんたち！」

茂みをかき分けた先には、ちょっとした空間が広がっていた。

その奥では、木で造られた台座の上に乗った、ひととき大きな水色の水晶玉がひとつ、まばゆいばかりの輝きを放っている。

あれが、今回の目的となっている、『あるもの』なんだわ。

水晶玉の前には、ずらりと並んだ制服姿の生徒たち。二年生の先輩方だ。水晶玉を守っているのだ。

そしてその中央に立つふたりは、流瀬先輩とミナミ先輩だった。

「愛美谷学園二年水組の学級委員、流瀬智樹と、副委員であるミナミ、そしてクラスメイト一同、あなた方がここまで無事に到達できたことを褒め讃えたいと思います」

副委員のミナミ先輩が代表して話を進める辺りからも、ふたりの上下関係をはつきりと示しているとわかる。

「でも、こちらとしても、水晶玉を取られるわけにはいかない。奪われたら連帯責任で、クラス全員が一単位落とした扱いになってしまふからね。本気で阻止させてもらっわ」

う……そんなことを言われたら、水晶玉を奪うなんて、できなくなっちゃう……。

そう思ったのだけど、そのあたしの考えを、やっぱりレイちゃんは見抜いたのだろう。

「ダメよ。向こうも本気で来る以上、こっちも本気を出さなきゃ、失礼に当たるわ」

「決戦は避けられない、ということだに」

「そういうことだよ。お嬢さんたちを傷つけてしまうことになるのは忍びないけど、これもクラスのお姫様たちのため。罪深いこの僕

を、許してくれたまえ」

相変わらずな流瀬先輩に呆れた目線を向けているミナミ先輩は、
軽くため息を漏らした後、キツとあたしたちを鋭く睨む。

「最終決戦の時間よ。かかってきなさい！」

二年水組の先輩たちとあたしたち四人の戦いは、激しいものとなった。

さすがにクラス全員で四人を相手にするというのはフェアじゃないからか、ミナミ先輩と流瀬先輩を筆頭に、その他二名がサポートにつく、といった体制であたしたちを迎え撃つ。

それでも、力の差は歴然としていた。

あたしたちが魔法を使って闇雲に水晶玉を奪い取ろうと躍起になっているのに、先輩たちは涼しい顔で軽々といなす、そんな状況だった。

「うにゅー、やっぱりあたしたちじゃダメだよー」

「泣きごと言わないの!」

「でも……もう、体力が……」

「男の子がなにを言ってるのだ」

あたしたちは声をかけ合って、どうにか気力を保つ。

「くすくす。焦っているようですね」

対して、先輩たちは余裕しゃくしゃくの様子。

ふにゅー、やっぱり敵わないよー。

「では、そろそろ終わりにしましょうか」

「そうだな。それじゃあ、全力攻撃いくぞ、『いなか』!」

いつもの雰囲気消して真面目な表情の流瀬先輩が叫んだ途端、

ピタッ。

ミナミ先輩の足が止まった。

「——うあ、しまった！」

流瀬先輩が顔面蒼白になり、大げさな身振りで慌てている。

???

あたしたちには疑問符が浮かぶばかりだったけど、次の瞬間——。

「下の名前で呼ぶな~~~~~!!!!!!」

普段の控えめな声からは想像もつかない大音量でミナミ先輩の叫び声が響き、

ザ——————！！

「うああああああああん!!!!!!」

尋常ではない量の涙を滝のように流しながら、大泣きし始めた。

「うわわわ!? いったいどうしたのかに!?!」

「ミナミは、本名が南部稻香^{みなべいなか}っていうんだよ。でも、その名前が大嫌いらしいんだ。だから絶対下の名前は名乗らない。小学生の頃に、田舎者って散々いじめられたからみたいんだけどね。こうなったらもう、手がつけられないんだ」

いつの間にかあたしたちのすぐ横まで退避してきていた流瀬先輩が、セイカちゃんの陰に隠れるようにして、ぶるぶると震えながら解説してくれた。

いや、あの、いくらなんでも、セイカちゃんを盾にするなんて。セイカちゃんはずでに腰を抜かして使い物にならない状態なのに。

と、それは置いて。

あたしはミナミ先輩に視線を戻す。

彼女の両目から溢れる涙は、流れるというよりは、噴き出すと表現したほうがいいかもしれない。

周囲は水溜りになり、ぬかるみになり、沼になり、といった様子で、水かさがどんどん増していた。

他の先輩たちも状況を理解したようで、水晶玉のある台座の辺りまで下がり、ミナミ先輩に怯えた視線を向けていた。

「ふにゃ、いくらなんでも、あんなに涙が流れたら、水分がなくなっちゃうんじゃない……」

人間には水分が大切だ。体の一割の水分がなくなると死に至るというのだから、あんなに涙を流したら……。

うにゃ〜！ ダメダメダメ、ミナミ先輩泣き止んで〜〜！

「ミナミの心配をしてくれるキミの優しさはよくわかったよ。でも、それは大丈夫。彼女は水魔法の使い手だからね。あの涙も無意識の魔法によるものなんだ」

いつの間にそばまで来たのか、流瀬先輩があたしの肩に手を回しながら、取り乱しているあたしの気を落ち着かせてくれた。

ふにゃ〜。初めて流瀬先輩が役立った！

あたしとしてはそう思っただけ感謝の気持ちまで生まれていたのだけだ。

でも、

「マナに触るな！」

「ふぎやつ！」

レイちゃんの鋭い蹴りによって、流瀬先輩は、泥水をたっぷりとたたえた地面に顔から突っ込んでしまった。

「だけど、このままじゃミナミの涙によって、ここは水没してしまう。それどころか、この山から大量の水が流れて、僕たちの住む町自体が水没してしまうかもしれないよ。お嬢さんたち、どうか、してくれ……ぐふっ」

かろうじて泥の中から顔を上げ、そう告げると、流瀬先輩は息絶えた。

「いや、殺さないでくれよ、マナちゃん……」

生きてたっ！

ちっ。……レイちゃんが、舌打ちする音が聞こえた。
今日もブラック・レイちゃんは健在みたい。

「……でも、どうすればいいのかな」

気を取り直して、あたしはレイちゃんに目を向ける。

「いつもどおりよ。わたくしたちは魔法使い。それを忘れちゃダメ」
「うん、そうだに」

「んふ。ボクも、頑張るよ」

「ふにゃ〜。いつもどおり、ね。……レイちゃん、指示お願い〜」
「はいはい、わかってるわよ」

レイちゃんの指示に合わせて、
カリンちゃんが鳥魔法で、ミナミ先輩をニワトリの気持ちにさせる。

セイカちゃんが風魔法で、ミナミ先輩の周りの空気の流れを止める。

レイちゃんが月魔法で、ミナミ先輩の周囲の明るさを奪う。

あたしが花魔法で、心を落ち着かせるお花をミナミ先輩の頭上に咲かせる。

ミナミ先輩は、鳥頭になってどうして泣いていたのかを忘れた。

ミナミ先輩が、自分の泣く声で今泣いているのだということを思い出さないように、耳に届く音を遮った。

ミナミ先輩が、自分の流した涙で泣いていたということを思い出さないように、目を見えないようにした。

そしてミナミ先輩は、少しずつだけど、落ち着きを取り戻していく。

——やがて、辺りは静寂に包まれた。

「助かったよ、ありがとう、お嬢さんたち」

「ミナミ、下の名前で呼ばれると我を忘れてしまうの。無意識の部分だから、自分でもどうしようもなくて……。本当にごめんなさい」

「いえいえ、大変なことにならなくて、よかったのだ」

「うにゅ、そうですよ、ミナミ先輩。だから顔を上げてください」

ミナミ先輩の心からの謝辞を受けて、あたたちも素直に応える。流瀬先輩を含め、二年水組の先輩たち全員が、一列に並んであたしたちに頭を下げていた。

と、そこで突然高らかな声が響いた。

「うふふ、水晶玉、いただきました」

え？

音もなく移動していたレイちゃんが、水晶玉を高々と掲げている。

「うあ、ずるい！」

「油断禁物ですよ、先輩方」

がつくりと肩を落とす先輩たち。

こうして、あたしたちの勝利で、バトルは終了した。

……ふにゅ、これでよかったのかなあ？

あたしはちよっと、先輩たちがかわいそうになってしまっていた。

裏山の中では、二年生の各クラスが管轄のエリアを持ち、その中心でそれぞれの水晶玉を守っていた。

結局、水晶玉を奪われたのは、ミナミ先輩たちの水組だけ。

つまり、目的の『あるもの』をゲットできたのは、あたしたちだけだった。

「毎年、ほとんどが二年生の圧勝で終わりますのに、マナさんたちは頑張りましたね。わたくしから、素敵なプレゼントを用意させていただきますので、楽しみに待っていてくださいね。うふふ」

学園長さんからの賞賛の言葉をいただき、遠足と称した魔法訓練対決は幕を閉じた。

ちなみに、水晶玉を奪われた二年生が単位を落とした扱いになるということとはなかった。そう言うておけば、みんな本気になるはず、という学園長の作戦だったのだようだ。

「んふ、終わってみれば、結構楽しかったかも……」

「なら、自分の足で歩いてほしいものだわ」

「あう……」

体力のないレイカちゃんは、すでに自分では歩けず、レイちゃんにおぶってもらっていたのだ。

ほんとに男の子なのか、やっぱり疑わしいわ、この子。

「でも、入学してみたら普通の授業ばかりで拍子抜けしていた部分もあるし、こういうイベントがあると、魔法科の学園なんだってことが実感できていいと思うわ」

文句を言いつつも、レイちゃんの顔には満足感が浮かんでいるように見えた。

「ま、セイカっただけじゃなくて、わちらもかなり疲れたけどに」
「あは、そうだね」。でも、みんなと一緒に頑張るのって、やっぱり楽しいわあ」

カリンちゃんとあたしも、疲労感はあるものの、なんとなく清々しい気分だった。

「すごく危険だった気もするけどね。でも、この学園がどんなところなのか、だいたいわかってるし、この程度じゃもう驚かないわ」
「そうだね」。とりあえず今日の一番の収穫は、ミナミ先輩の弱点を知れたことだに！」

「でも、知ってても使えないと思う……」

「確かに、弱点を突いた時点で、こっちが終わってしまうわね」

「あは、あたしとしては、ミナミ先輩だけはまともだと思ってたのに、やっぱりあの人も変だったんだな」って……」

「うわっ、マナっち、それちょっとひどいかもなのだに」

「ふにゅ、カリンちゃん、告げ口はしないでねえ？」

疲れてはいたけど、学園に戻るあたしたちの足取りは軽く、ほのぼのとした空気に包まれていた。

数日後。

素敵なご褒美とやらが、あたしたちの前にお目見えした。

それは、勇敢な魔法使たちと銘打った、あたしたち四人の銅像だった。

ニワトリのコスプレをしながら元気よく羽根を羽ばたかせているカリンちゃん。

風でキュロットズボンのすそがめくれそうになって、恥ずかしそうに手で押さえているセイカちゃん。

高笑いを上げながら恍惚の表情を浮かべてムチを振っているレイちゃん。

そして、お花を頭上に咲かせバカっぽい笑みを浮かべながらよだれを垂れ流すあたし……。

ふにや~~~~！？ やめてえ、恥ずかしい~~~~！ なによ、これ~~~~！？

「晒し者になった気分だに……」

「だいたい、どうしてわたくし、ムチなんて振っているのよ？ 他の三人は実際に使った魔法のイメージなのに！」

……きつとそれがレイちゃんのイメージなんだよ。
もちろん声になんて出せはしなかったけど。

ともかく、そんなあたしたちの銅像は、学園の正門から入ってすぐの一番目立つ場所に設置されていて、それからしばらく、あたしたちはあらゆる意味で注目の的となってしまうた。

追記。

この銅像はその後、数十年もの長きに渡って、愛美谷学園の名物となるのだった――。

「マナ、おはよう」

「ふにゅ、レイちゃん！ おはよ」

いつもの通学路で、爽やかな挨拶を交わす。
でも、爽やかな朝、とはいかない。

ここ最近はずつと雨。いったいどれだけのあいだ、お日様の顔を
拝めない日が続いているのだろう。

梅雨だから仕方がないとはいえ、これだけじめじめとした雨が降
り続くと、心までじめじめしてしまいそう。

「マナティなんだから、喜ぶべきじゃないのかにゅ？」

「にゅ、マナティ言うなゅ！」

違和感なくいつの間にか合流して会話に加わってるカリンちゃん。
いつもどおりの朝ではある。

でも、やっぱりじめじめした日が続くのは、あまり嬉しくない。

「ボ……ボクは雨って、結構好き……。泣いてても、ごまかせるし
……」

セイカちゃんまで、いつの間にか合流していた。

でも、好き嫌いとはかくとして、その理由はどうなのよ？

「そつえば、今日の放課後は生徒会の会議があるって言ってたに
ゅ」

カリンちゃんの言うとおり、昨日、会長さんから言伝を受けていた。

「面倒だけど、行かないとなにされるかわからないし、仕方がないわよね。突然長旅に出たりとかしないかしら、あの人」

レイちゃんは今日もブラックでした。

なんか最近、ブラック率が高くなってる気がするなあ。

「あつ、アジサイだよ。ふにゃ、とっても綺麗」

「んふ、そうだね……。この時期はやっぱり、アジサイだね」

「季節を感じさせるに」

こんなじとじとした雨の中ではあつたけど、季節のわびさびを感じたからか、不思議と心が安らいでいく。

そんなあたしたち三人の笑顔とは対照的に、レイちゃんは明らかに不機嫌そうな顔をしていた。

「ふん、わたくしはアジサイになんて興味ないわ」

ふにゃ？ どうしたんだろう？

レイちゃんは、ああ見えて、お花とか綺麗なものは好きだったはずなのに。

アジサイだけは、なにか特別なのかな？

「べつにいいでしょ？ わたくしにだって嫌いなもののひとつやふたつ、あるわよ」

「……ひとつやふたつじゃないのだよ。とくに食べ物の好き嫌いは、常識を逸脱しているくらいだに」

「う、うるさいわね。のんびりしてたら遅刻するわよ！」

カリンちゃんのツツコミにも、不機嫌に答えるのみ。
ふにゃ、ほんとにどうしたんだろう、レイちゃん。

「……洗濯物が乾かなくて、不機嫌なのかな……？」

「ふにゅ。でも制服だよ？ 長い休みのとき以外は、洗ったりしないんじゃない？」

「体操着とかジャージとかもあるのだよ」

「あつ、そっか」

「ふん、わたくしの場合、制服だけでも数着は用意しているし、体操着なら十着以上あるわよ」

結局レイちゃんは不機嫌なまま、そして不機嫌な理由もわからないまま、あたしたちは学校に到着してしまった。

「ごきげんよう、みなさん。それでは、本日の会議を始めさせていただきます」

会長さんの挨拶により、生徒会執行部の会議は開始された。

「ご存知のとおり、アジサイ祭の季節となりました」
「ちよつと待ってください。わたくしたちは知らないです」

一年生を代表して、レイちゃんがすかさずツツコミを入れる。
ふにゅ。さすがだわ。手も早いけど口も早い。

「……マナ……」

うにゅ、また表情に出ていたみたい。あたしは素早く目を逸らす。

レイちゃんのツツコミを受けた会長さんは、一瞬驚いたような目をしてはいたけど、すぐにいつもの笑顔に戻して言葉を続けた。

「おほほほ、そうでしたわね。私の中ではすでに当然のことなっておりますので。それでは、改めて……」

こほん。会長さんは軽くセキ払いをして説明を始める。

「この時期、学校の行事としてはとくになにもなく、ヒマでつまらない日々が続きます。そこで、生徒会主催でイベントをやっちゃいましょう、ということですよ」

思いのほか短い説明だった。
というか、ヒマだからって勝手にイベント開催なんてして、いいのかなあ？

「お嬢さんたち、心配はいらないよ。学校というのはもちろん勉強をする場所だけど、それと同じくらい、クラスや部活動を通じてのコミュニケーションも大切だね。学園長からの許可だってもらっているのさ」

「なるほど、あの学園長さんなら、面白そうならオッケーです、とか言いそうだし」

カリンちゃんが的を射た意見を述べる。
うんうん、あたしもそう思う。

「この学園のことが、よくわかってきてるじゃない。そのとおりよ」
眼鏡の位置を直しながら、真面目な顔で答えるミナミ先輩。

でも、こないだの一件から、ミナミ先輩を見る目もちょっと変わってしまった気がする。

とりあえず、下の名前だけは絶対に口走らないようにしないとね。

「……それで、あの、アジサイ祭というのは、なにをするイベントなんですか？」

セイカちゃんが控えめに質問する。

「いい質問ですね、ワトソンくん」

「ワトソンじゃないです……」

「アジサイ祭でなにをするかは、まったく決まっていません。これから私たちが決めるのです」

「つまり、やりたい放題ってわけさ」

ゲシッ！

流瀬先輩には鋭い蹴りがお見舞いされた。

言葉の内容が違っていたからなのか、それとも会長さんの喋りを邪魔したからなのか。

「さすがに、やりたい放題ってわけにはいかないわ。顧問の許可も必要だしね」

ミナミ先輩が解説を加えてくれたけど、でも、それって……。

「……早兔子先生の許可なんて、あってもなくても同じようなものなんじゃないかしら？ 早兔子先生は強く言えばなんでもOK出しちゃうでしょ？」

「……そうなのよね。もう少し、しっかりしてもらいたいんだけど……」

レイちゃんの言葉に頷き、はあ、と深いため息をつくミナミ先輩。気苦労は絶えないみたいだ。

さて、会議はまとまることなく、ぐだぐだになっていた。

主に会長さんや流瀬先輩がおかしな案を出し、ミナミ先輩を筆頭にあたしたちも含めて必死で止める、という構図が出来上がっている。

「魔法を使って学校中の教室をモンスターの口にして、怪物に食べられる恐怖を体験するイベントなんてどうかしら？」

「女の子全員が僕をもてなしてくれるってイベントはどうだい？」

「誰が一番最初に学園長を怒らせてドラゴン化させるか競うイベントもいいわね」

「全校生徒で昼寝つても、楽でいいかもしれないね」

「いつそのこと、学園自体を南の島あたりにワープさせて、バカンスを楽しむってものアリかしら？」

エトセトラエトセトラ。

なんというか、会議なんて名ばかりの、自分勝手な意見の出し合いだった。

この人たちっていったい……。

「もう、真面目にしない！」

と、いくら温厚なミナミ先輩でも、大声になってしまうというものだ。

でも、ミナミ先輩が『爆発』したら大変だというのがわかっているからだろう、その大声が功を奏したみたいで、

「仕方ありませんわね。例年どおりのイベントでいきましょうか」

明らかに不満顔ではあったけど、会長さんはため息まじりにそう言った。

「例年どおりつても、わちらにはわからないのだけどに」

「おほほほ、そうでしたわね。普通すぎてつまらないのですけれど、学園中を色とりどりのアジサイで飾って、各クラス、ささやかな模擬店を出すんですの。プチ学園祭って感じかもしれないですわね」

「梅雨といえばアジサイだしね」

流瀬先輩もやっぱり不満顔だ。

それにしても、思ったよりまともだわ。結構楽しめそう。

あたしたちも、うん、それでいいんじゃないかなーと思い始めていた。

だけど、なぜかレイちゃんはさっきから黙ったままだ。どうしたのかな？

「……ほら、朝のことを思い出すのだ」

そつと耳打ちしてくれるカリンちゃん。

あ、そうか。

「レイちゃん、アジサイ嫌いみたいだったよね……」

そのあたしの声に飛びついてきたのは、会長さんのほうだった。

「あらあら、レイさん、アジサイ苦手なんですのね。……おほほほほ、なら、この案で決定ですわ！」

さっきの表情とは打って変わって心底楽しそうな笑顔を浮かべている。

ふにゅ、この人、いぢめっ子だあ。

一方のレイちゃんは、そう言われてもやっぱり黙ったまま。

ふにゅ、レイちゃん、かわいそう……。

とはいえ、歓喜に満ちた会長さんに向かって、反対意見なんて出せるはずもなかった。

いろいろと不安ではあったけど、ともかくアジサイ祭当日になった。

「うふふ、思ったより随分とまともね」

「そうだに～。ささやかな模擬店っていう制限も、アジサイのイメージに合ってるかもだに～」

「ふにゅ～、なんかまつたりでいいね」

「んふ、アジサイも綺麗」

セイカちゃん言葉で、あたしは思い出した。

「あつ、レイちゃん、大丈夫？ アジサイ嫌いなんでしょ～？」

「ふふ、心配してくれるのね、ありがとう。でも大丈夫。校舎内に飾ってあるアジサイなら、きっと大丈夫だと思うから」

「ふにゅ～？」

苦手なのって、アジサイの特定の種類とかなのかな？

「ほら、あなたたち。そんなところで固まっていたはダメですよ。

生徒会執行部は、見回りの仕事があるのですから。ひとりずつ担当場所を決めてありましたでしょう？」

会長さんがあたしたちに注意を促す。

でもその顔は、これ以上ないほど満面の笑顔だった。生徒会主催のイベントということで、テンションも上がっているようだ。

「全校生徒が、私の手のひらの上で踊っているかのような満足感で

すわね」

……あなたは、生徒会長という役職についてはいけない人のような気がします。

「……マナさん、早く見回りに行きましょうね？」

ふにや~~~~！ 表情で読み取られちゃったみたい。
会長さんのこめかみに青筋が見えるよお。

あたしは、消されないうちに見回りへと向かうことにした。

「ふ」。マナっちは相変わらずだったに」

わちは今、プリントに示された自分の見回り場所を素直に回っているところだった。

クラスごとの模擬店は、ちょっとした喫茶店とか、小物店とか、占いの館とか、いろいろな種類がある。

「でも、いまいち普通の店ばかりで、つまらないに」

どこでなんの店をやっているのかが書かれたパンフレットでもあればいいのだけど、あいにくそんなものは用意されていなかった。
生徒会長が面倒くさがったからだ。

「どこになにがあるかわからないほうが、サプライズの要素でいい

「んじやありませんか？」

なんて、あとから取ってつけたように理由づけしていたけど。

模擬店は、クラスごとに差はあるものの、それほど大きな規模じゃない。だから数人に店を任せて、他の人は別のクラスの模擬店を巡ることができる。

交代の時間までは、自由にまったりしていいのだ。

「うきゃ！ 激辛お菓子店をやってるクラスがあるなんて！ ほんとにサプライズを見つけれられるとは思わなかったに」

わちはそのクラスに入り、ハバネロ味のクッキーやら、タバスコチップスやら、五十倍カレースティックやら、心ときめくお菓子類に踊り出しそうなのを必死にこらえていた。

見回りをしている立場のわちではあるけど、実際には他の生徒たちとたいして変わらない。

担当場所は決められているものの、見回りしつつ、ちょっと場所を離れて模擬店を見たりもできる。

「考えてみたら、学校内をひとりで歩くのって、久しぶりだに」

思えばわちは、いつでも周りにはマナっちゃんやレイっちがいた。この学園に入学してからは、セイカっちも加わって、さらに楽しく日々を過ごしている。

普段からずっとそうだから気にしたことなんてなかったし、それが当たり前だと思っていたけど……。

こうやってひとりで歩いていると、いつもみんながいて、温かい気持ちにさせてもらっていたんだなと実感する。

「……みんなには、感謝しないといけないに。手作りの激辛クッ

キーでも用意してあげようかに」

と――。

ドゴーーーーーン！ バリバリバリバリ！

突然轟音が聞こえてきたのは、わちがこんな感じでほんわかした気持ちになっていたときだった。

「んふ、みんな楽しそう」

ボクは、決められた見回り場所へと向かっていた。
視界に入ってくるクラスの模擬店は、それぞれに大盛況のようだった。

店員をしている人も、模擬店を巡って買い物をしている人も、みんな本当に楽しそうな笑顔でいっぱいだった。
思わずボクも笑みを浮べてしまう。

でも……。

「みんながいないと、ちょっと寂しいな……」

昔からボクは、はっきりしない奴と、たびたび言われていた。
小学校低学年くらいの頃には、いじめられたりもしていた。
自分でも気が弱いのはよくわかつている。
どうにかしないと、と思っているのも事実だ。

とはいえ、そんな急にどうにかできる問題でもない。
どうすればいいのかもわからない。

だから今のボクはまだ、気の弱いボクのままだ。
それを鍛え直そうとしている部分はあるけど、こんな弱いボクを、
文句を言いながらも受け入れてくれたマナさんたち。
本当に嬉しい。

「んふ」

みんなの笑顔を思い浮かべただけで、温かい気持ちになる。
そんな温かさに包まれながら、ぼーっと歩いていると、目の前の
クラスから騒がしい声が聞こえてきた。

ちよつと嫌な予感もするけど……。

でも、見回り場所だし、行くしかないよね。

ボクはその教室に足を踏み入れた。

「ど……どうしたんですか？」

教室に入ってすぐの場所に立っていた女子生徒に、ボクは話しかける。

見ず知らずの人に話しかけるなんて恥ずかしかったけど、これを生徒会としての仕事なのだと自分を奮い立たせた。

だけど、話しかけるまでもなかったかもしれない。

このクラスは古本市をやっているようだけど、本を並べてるのは、教室の端に配置したテーブルの上だけ。

教室の真ん中には、たくさんのアジサイが飾られていた。

そんなアジサイを押しつけるように、ボクの目の前には、でんつと異常な存在感のある、ぬめつとした物体がうごめいていた。

ぬめつとした上に、巻貝が覆いかぶさったそれは、カタツムリだった。

……ただし、全長十メートルくらいある、とっても巨大なカタツムリ……。

しかも、

バリバリバリバリ！

顔と思われる部分から生えた二本の突起——目になるのかな？

そのあいだで、激しく放電している。

「……。はい、この物体はなんなのだろう。」

「あなた、生徒会執行部の人でしょ？　アレ、どうにかしてよ！」

思わず大声を上げてしまって、顔が赤くなる。

でも、どうにかしてよって、どうすればいいっていうの？

そ……そうだ、誰か、呼んでこよう！

レイさんがいいよね。 マナさんでもいいかな。 カリンさんもあれで頼りになるんだよね。

あ……ミナミ先輩のほうがいいかな？でも会長さんや流瀬先輩は論外かな……。

「ちょっと！早くどっにかして！」

「ええ？でも……」

教室から出てみんなを探そうとしていたボクの腕を引っ張る女子生徒。

あうう……、これじゃあ教室から出ていけないよお……。

連絡用の携帯電話とかでもあればいいんだけど、そんなの持っていないし。

そんなことを考えているあいだにも巨大カタツムリの放電は続き、さらに激しさを増していた。

そしてそのカタツムリが、のそのそと動き始める。

「きゃ~~~~~!!」

生徒たちの悲鳴が響く。

カタツムリはその声に反応したのか、生徒たちのほうへゆっくりとその顔を向けた。

バチバチと空気を切り裂くような音はますます大きくなり、放電する光も強く激しくなっていく。

このままでは危ない。それは、鈍感なボクにでも、さすがにわかった。

「ちょっと、なにしてるのよ！ はやくどうにかして！」

そんな無茶な、と思わなくもなかったけど、でも、ボクは見回りをしている生徒会執行部員なんだ。

放電までしている、こんな巨大なカタツムリが教室に居座っている現状。

一刻の猶予もない。

他の人を呼んでくる時間なんてなさそうだ。

ここは、ボクがひとりでどうにかするしかない！

「お……おい、カタツムリ！ お前の相手は、こっちだよ！」

ボクは意を決して、巨大カタツムリの目の前に飛び出した。

うう……。

飛び出して巨大カタツムリの注意を引きつけはしたものの、考えてみたら作戦とか戦略とか、そんなのまったく考えていなかった。いったい、このボクになにができるっていうのだろう……。

カタツムリが、ぐおおおお、と大音響を轟かせながらこっちを向くと、その巨大さにボクは目を見張った。

首が痛くなるくらいに見上げなければ、そのカタツムリの顔らしき部分は見えない。そんな巨大な物体が、ボクの上に影とべちゃべちな粘液を落とす。

うううう……。

思わず腰が引けてしまう。

……いけないいけない。ここは、ボクが頑張らなきゃ！

いくら魔法科で有名な愛美谷学園に入学したといっても、まだ一年生。基礎の授業があるだけで、実践的な魔法なんてまだ教えてもらっていない。

だから、今までの生活で身につけてきた、得意属性の魔法で頑張るしかない。

ボクは、ぐつと腕に力を込める。

バチバチバチバチ！

カタツムリは、ボクを目標に定めたようだ。放電する音だけでも耳を切り裂かれそうになる。

直撃を受けたらひとたまりもないだろう。
じつとりとした汗が髪の毛を張りつかせる。

ボクの風魔法の場合、いくら得意属性だといっても、他と比べれば少しだけ得意、という程度だ。

こんな巨大なカタツムリを切り刻めるような風を起こせるわけじゃない。

だから、一瞬を待つ。

ぐおおおおおおん！

カタツムリの咆哮が鳴り響く。

カタツムリって、うなり声を上げたりするんだ……。 もっとも、普通のカタツムリとは違うのかもしれないけど。

と、ダメダメ。集中しなきゃ。

ボクはじつとカタツムリを睨みつける。

そして、カタツムリが動いた。

触角を前方に垂らすようにして、ボクを目がけて電撃を放つ。

このときを待っていた！

毒を持つ生物は自分の毒で死んだりはしないというけど、いくらなんでも自分で放った電撃だから自分には効かない、なんてことはないはず。

両手を大きく振り上げ、ボクは風を起こした。

電撃を、風で弾き返そうと考えたのだ！

風で電撃の進行を止め、さらに跳ね返すだなんて、そんなことが本当にできるのか、それはボクにもわからない。

でも、他に思い浮かばなかったボクには、この作戦に賭けるしかなかった。

ブワァー………！

電撃の凄まじい轟音の前では頼りない風の音。

でも、どうにか電撃の進行は止まったように見えた。

とはいえ、弾き返すには至っていない。

……ここで諦めちゃダメだ！ 頑張らなきゃ！

気合いを振り絞ると、風はその勢いを増し、台風のように渦巻いた。

その猛り狂った渦の奔流によって、電撃は綺麗に百八十度、方向転換する。

バリバリバリバリ、ババババババババババ！

電撃は、それを放出した巨大カタツムリ自身を包み込み、激しい閃光と耳をつんざくような音の洪水を生み出す。

ひとしきり暴れ回っていたカタツムリは、みるみるうちにその巨体を縮めていき、やがて、見えなくなった。

静かになった教室の中央付近に歩み寄ってみると、飾られていたアジサイの上に、小さな普通のカタツムリが一匹、ちょこんと乗っかっていた。

「う……うめんなさい……」

呆然と成り行きを見ていた生徒たちの後ろから、バツが悪そうにつぶやきながら出てきたのは……。

「レイさん……」

いつもとは違った雰囲気です惑ってしまったけど、それはレイさんに間違いなかった。

「さっきの音は、なんなのだ!？」

「セイカちゃん! 服も髪もそんなに乱れて、いったいどうしたの!？ 大丈夫!？」

騒ぎを聞きつけ、駆けつけてくれたのだろう、カリンさんとマナさんも教室に入ってきた。

「あれ？ レイっちまでいるに。どうしたのだ？」

「……………」

まだ軽く震えているレイさんだったけど、やがてポツリポツリと話し始めた。

「わたくし、カタツムリとかナメクジとか、ヌメヌメしたものが大嫌いなよ……」

そうだったんだ……。

んふ。レイさん、ちょっと可愛い。なんて、笑ったら悪いかな。

「ふにゃ。だからアジサイのこと、嫌ってたのね」

「なるほどに。雨に濡れたアジサイにくっついてるカタツムリは、ある意味梅雨の基本だもん」

マナさんもカリンさんもそれぞれ納得したようで、小さく頷きながら、レイさんを優しくな瞳で見つめていた。

「ええ。でも教室にあるアジサイなら大丈夫と思っていたのだけれど、見回りに向かうあいだに、本につれられてこのクラスに入ってみたら、アジサイの上にカタツムリがいて……」

「レイちゃん、見かけによらず、本読むの好きだもんね」

「見かけによらずは余計よ。……とにかく、それで慌ててしまっと思わず魔法を使って退治しようとしたの。そうしたら、どういうわけか巨大化して……」

彼女は巨大になったカタツムリを見て、恐怖も同じように巨大化してしまい、震え上がって今まで隠れていたのだという。

でも、どうして巨大化なんてしたのだろう？

レイさんの魔法が失敗したってことなのかな？

と、そのとき。

パチパチパチ。教室内に突然拍手が響いた。

拍手をしながら現れたのは、会長さん、ミナミ先輩、流瀬先輩の三人だった。

「ふにゃ、会長さん？」

マナさんが目を丸くしていた。
もちろん、ボクもカリンさんもだ。レイさんはまだ、うつむき気味だったけど。

このタイミングで出てきて、拍手までしてるっていうのは、もしかしてずっと見てたってこと？

そんな心の中の疑問に答えるかのように、会長さんが口を開いた。

「おほほほ。素晴らしかったわ、セイカさん！」

がしつとボクの両肩をつかんで笑顔を向けてくる会長さん。
ふわっと、いい香りがした。

至近距離で見つめられて、ボクは思わず考えていた。この人、外見だけは完璧なお嬢様っぽいになあ、と。

内面を知っている人にとっては、プラスマイナスゼロ、ううん、むしろマイナスと言ってもいいくらいだろうけど。

それはともかく、会長さんはボクの肩をつかんだまま喋り続けた。

「実は今回のイベントには、別の目的があったのです。今年は新入生が四人も入部してくれて、とても嬉しい限りなのですが、どうし

ても心配なことがありましたの。それが、セイカさん、あなただったのです」

「え……ボク、ですか……？」

ボクの肩から手を離すと、会長さんは、ゆったりと歩みながら話を続ける。

「四人とも、ひと癖もふた癖もある感じではありませんけれど、見所のある人たちです。それは間違いないと思っていきますけれど、セイカさんはちよつと、人に頼りすぎな部分があるのが、ずつと気になつておりましたの」

う……確かにボクは決断力もないし、みんなに任せてしまふことが多い。

それは自分でもわかつてはいたけど。

改めて他の人から言われると、ちよつと沈んでしまふ。

「おほほほ。べつに責めているわけではありませんわ。でも、最初私は私も気づかなかつたのですけれど、あなたは男の子なのですから、もう少し男らしくなつてもいいのではないかと、そう考えたわけです」

くるつと回転して、再びボクのほうに向き直ると、会長さんは手を伸ばしてボクの頬にそつと手を触れた。

「……こんなすべすべお肌をしているのに、男の子だなんて……。うらめしい……」

え？　ちよつと、会長さん？　目つきが変わってませんか……？　と、ミナミ先輩がすかさず、会長さんの後ろ頭をバシツと叩く。

「はっ！ …… あらやだ、私ったらつい。おほほほほ」

……つい、って……。

ミナミ先輩が叩いて会長さんを正気に戻してくれなかったら、ボクはどうなっていたのだろう……。

「ともかくですね。私たちは、セイカさんを男らしくしよう作戦を、極秘裏に決行していたのです」

「そ……そうだったんですか……？ あっ、もしかして、みんなも知ってたの……？」

ボクはマナさんたちに視線を巡らす。

「ふにゅ？ ううん、あたしは知らなかったよ〜？」

「わちも、全然知らなかったのだに」

「……わたくしもよ」

同級生三人はみんな、首を横に振った。

「私たち上級生だけで、勝手に作戦を実行していたのよ。ごめんなさいね」

ミナミ先輩が軽く頭を下げる。

分別のあるミナミ先輩でも止めなかったというのは、会長さんがノリノリで、止めても無駄だから気が済むまでやらせるしかない判断したということかな。

「男らしくなるためには、誰にも頼らず自分自身で対処する癖をつけるべきだろうと、私は思いましたの。それで私たちは、セイカさ

んのあとをずっとつけて、隠れて様子を見ていたのです」

「こそそと人のあとをつけるなんて、僕の趣味じゃなかったんだけどね。会長さんの願いとあらば、聞かないわけにはいかないだろう？ 仕方なく、加担したってわけさ」

流瀬先輩……。普段の言動から考えるに、説得力ないです……。なんて、いくら流瀬先輩相手でも、口には出せなかった。

「このクラスがセイカさんの見回り場所だとわかっておりましたので、少々魔法で仕掛けを施したのです。ちょうどアジサイの中にいたカタツムリさんを使わせていただきました。でんでん虫ですから、電気ビリビリが似合うかもということで、私が魔法を使って、放電するカタツムリにしてみましたのですわ」

……。でんでん虫……。電電虫……。電気ビリビリ……。ってこと？
なんとというか、おかしな発想かも……。
会長さんらしいといえらしいのだけど……。

「まさかレイさんが魔法の上書きをしてしまうとは思ってもよらなかったのですけれどね。どうやら放電を促す魔法とレイさんの月魔法との干渉によって、巨大化するなどという副作用が出てしまったみたいですね。おほほほほほ」

「笑いごとじゃないのだよ」

「うにゅ、そうですね。大惨事になっちゃうかもしれないからですよ」

マナちゃんたちに責められて、会長さんはしゅんと沈んだ表情を浮かべる。

「でも、それをセイカさんが鎮めてくれた」

「そうそう、そうです。まさに、私たちの狙いどおりでしたわ！」

ミナミ先輩のフォローに飛びつく会長さん。すべて計算どおりでしたのよ、とでも言いたそうに、おーっほっほっほと笑う。

背後では、ミナミ先輩が深いため息をついていた。

でも、大変なことになりそうだったとはいえ、ボクは会長さんに感謝していた。

だって、自分の力で事態を解決できたから。

まだまだ微力だけど、ボクだってやればできるんだ。

これからは、もう少し男らしく生きていこう。そう心に誓っていた。

「ま、とにかく、無事でなによりなのだ。ここは『セイカちゃん頑張ったね会』ってことで、甘味処にでも行かないか？　どこかのクラスでやってたよに？」

「あは、いいね。セイカちゃん、行こ？」

「うん、もちろん行くよ！　甘いもの、だ〜い好き」

「レイちゃんも行くでしょ？」

「うふふ、ええ、もちろん」

やっと復活したレイさんも、すでにいつもどおりだった。

こうしてボクは、いつものメンバーで和気あいあいと、甘味処を目指したのだった。

女の子三人と、きゃいきゃい笑いながら甘味処へと向かっていくセイカさんの後ろ姿を、私は真剣な眼差しで見つめていました。

「……少しは男らしくなったかも、なんて思ったのも、ほんの一瞬だけでしたわね」

思わずため息もこぼれ落ちてしまうというものです。作戦は結局失敗だったということでしょうか。

ですが、不思議と悪い気分ではありませんでした。

「いつもどおりが一番ってことよ」

「そうだね」。セイカちゃんは、ああやって笑ってるほうが、らしくていいと思うな、僕は」

「……確かに、そうかもしれないわね」

温かな眼差しを向けているミナミさんと流瀬くんを、私は飛びきりの笑顔で見つめ返しました。

そして、ひと言。

「では、私もいつもどおり、大暴れといきましょうか！」

『それはやめろ！』

なぜだか途端に、鋭いダブルツッコミが私の頭を強襲するのでした。

「みなさん、いらっしやい」

お母さんがみんなを、いつもながらのほんわか笑顔で出迎える。

「お邪魔しまゝす、おばさん」

「お・ね・え・さ・ん！」

「お……お邪魔します、お姉さん……」

「はい、よくできました」

……お母さん、初めてうちに来たセイカちゃんが、びっくりしてるよ。

カリンちゃんとレイちゃんは、慣れてるからいいけど。

それはともかく、今日は勉強会。

期末テストも最終日の明日、あたしにとって最大の強敵、数学を前にして、みんなと一緒に勉強することで頑張ろうと決めたのだ。

……ほとんど一方的にあたしが教わるだけなんだけど。

魔法科に入ったのに、一般教科もあるなんて。あたしとしては、心から嘆いているわけだけど。

ともかく、あるのだから仕方がない。頑張らないと、留年しちゃうわ。

「あつ、いらっしやいませ。いつも姉がお世話になってます」

ふと顔を出したイサキちゃんが礼儀正しく挨拶をする。

ふにゃ、さすがあたしの弟。できのいい弟を持つと鼻が高いわ

」。

「イサキくんがマナっちの弟だなんて、ほんと、信じられないに」

ちよつと、カリンちゃん、それってどういうこと？」

不満顔のあたしを尻目に、カリンちゃんもレイちゃんも、それにイサキちゃんとは初対面なはずのセイカちゃんまでもが、深くうんうんと頷いていた。

ともかく、あたしはみんなを先導して自分の部屋へと入る。

「ちよつと散らかってるけど、我慢してね」

「ほんとに汚いに」

カリンちゃん、遠慮のかけらもないお言葉、ありがとう……。

「でも、可愛い部屋……」

「マナは昔っから、ぬいぐるみとか大好きだもんね。……お子様だから」

「お子様言っなあ」！

ほのぼのムードでいつもどおりの和気あいあいなあたしたちだった。

「……マナさんたちは、そんなに昔から一緒なの？」

セイカちゃんが、遠慮気味に尋ねる。

「うに、小学校に入学したときからの腐れ縁なのだよ」

「だから、腐ってないってば」

「うふふ。こんなやり取りも、昔っからのことなのよ」

「へー、そうなんだ。いいなあ。ボクには幼馴染みっていないから、うらやましい……」

ふにゃん。そう言われると、とてもむずがゆいような、恥ずかしいけど温かい気持ちになるわ。

「それにしてもセイカっち、女の子の部屋に入るのって、男の子だと緊張したりしないのかに？」

「え？ んふ、ボクの部屋も、こんな感じだから……」

「セイカちゃんも、ぬいぐるみとか、好きなんだ！」

「……うん。マナさんほどじゃないけど、集めてるの」

嬉しそうな笑顔を浮かべるセイカちゃん。

「……セイカらしいとは思っけれど、男の子として、それはどうなのかしらね？」

「あう……でも……」

レイちゃんの言葉に、一転して涙目になる。

ふにゅ。セイカちゃんは表情がころころよく変わって、見飽きないわ。

「あは、可愛いものが好きなのは、男の子だって変わらないんだよ。ねっ？」

「う、うん！」

満面の笑みで答えるセイカちゃんは、やっぱり男の子だとは思えない可愛らしさだった。

と、いつまでも喋ってなんてられない。今日は勉強会なのだ。

思いつきり忘れそうになっていたけど。

あたしは早速、折りたたみ式のテーブルを用意して部屋の真ん中に置く。

みんなそれぞれ、教科書とノート取り出してテーブルに陣取った。さあ、勉強会の開始だ！ 頼りにしてますよ、みなさん！

「人をあてにしてばかりではダメなのだよね？」

カリンちゃんがいつものように、心の中の声にツツコミを入れてきた。

「頑張ってるかしら？」

勉強会を始めてから三十分くらい経ち、微妙に集中力が切れ始めた頃、絶妙なタイミングでお母さんが部屋に入ってきた。

「ケーキとお紅茶を用意したわ。もしよかったら、どうぞ」

お母さんは、ケーキのお皿とティーカップがそれぞれ四つずつ乗せられた、大きなトレイを持っていた。

ふにや～、見るからに危なっかしいよお。

「やあ、いらつしやい」

そのお母さんの後ろでは、お父さん爽やかな笑顔を見せていた。

手が塞がっているお母さんの代わりにドアを開けたのはお父さんだったようだ。

うちのお父さんは作家をやっているから、家にいることが多い。作家のお仕事も忙しいとは思うけど、お母さんが家事で失敗したときのサポートなんかもこなす、自慢のお父さん。

ほんわかなお母さんと、ほんとにお似合いで、ラブラブな夫婦って感じなのだ。

ふにゃ。あたしも将来、あんなふうになりたいな。

「このケーキ、お父さんに買ってきてもらったのよ」

そう言って、お母さんはトレイを勉強机の上に置く。

テーブルの上は教科書やノートで置き場がなかったからだ。

「すみません、いただきます」

「いいのよ。それより、マナちゃんをよろしくね。お紅茶が冷めないうちに、きりのいいところで食べるんですよ」

ほのぼのした雰囲気を残して、お母さんは去っていった。

「美味しいに〜」

「うん」

お母さんが部屋から出ていったあと、あたしたちはすぐに勉強を中断して、ティータイムを始めていた。

ふにや〜。紅茶も美味しいし、ケーキも甘くて、もう最高〜♪と、レイちゃんのテンションが低いわ〜。どうしたんだろ？

「レイっちは、おなかのお肉が気になっているのだに〜」

あ〜、なるほど。そう聞いたら、あたしもちよつと気になってきた。でも甘いものには勝てないのよね〜。ふみゆ〜……。

「そつ、そんなことないわよ！ わたくしは太ったりなんてしないんだから！」

レイちゃんは、ムキになってカリンちゃんに反論を返して、ケーキにかぶりつく。

「ふにゆ、レイちゃん、そんな一気に食べるなんて、はしたないよあ〜」

「ちまちま食べてるわりに、ボロボロこぼしまくってるマナっちは、言われたくないんじゃないかに〜」

「はう〜」

「んふ、マナさん、口の周りにクリームもついてる……」

「あうあう〜」

いつもどおり、軽口を言い合いながら、楽しいひとときを過ごすあたしたち。

ささやかかもしれないけど、とっても幸せだった。

「それにしても、ぬいぐるみやらお花のついた小物やら、花柄のカーテンやら、やっぱりマナっちの部屋は可愛いに〜」

「あは、ありがと〜」

「ほんと、このウサギさんも可愛い〜」

セイカちゃんが近くに置いてあったウサギのぬいぐるみを手に取ってそう言ってくれた。

「あは、それ、大好きなぬいぐるみなんだ〜、ちよつと古いから、色もくすんじやってるけど……」

それでも、とっても大好きで、とっても大切な、あたしの宝物。

「うふふ、でも、こんなにお友達もたくさんいて、ぬいぐるみたちも喜んでるわね」

「わわ、レイっちが似合わないこと言ったのだ!」

「ちよつと、似合わないってどういうことよ!？」

「そうそう、そうやって眉をつり上げてるのがお似合い……って、レイっち、冗談なのだよ!? おもむろに首を締めようとするのは、やめるのだ〜」

「だったら、こつよ!」

「うきやきやきやきや! わちが悪かった、やめるのだ〜〜!」

レイちゃんのくすぐり攻撃に、カリンちゃんは身をよじって逃れようとする。

その彼女の手が、隣にいたセイカちゃんにぶつかった。

「きゃっ！」

……セイカちゃん、男の子がそんな悲鳴を上げちゃダメ、なんて言ってる場合ではなかったみたい。

カリンちゃんの手がぶつかったセイカちゃんは、思わず持っていたぬいぐるみを落としてしまう。

ぬいぐるみは、セイカちゃんの手を離れてスローモーションのようになっすぐ、目の前に置かれていたケーキのお皿や紅茶のカップの上へ……。

こういつときつて、ほんとに時間が止まったみたいに見えるんだ……。

次の瞬間。

ガシャーーン！

テーブルに乗っていたいくつかのカップがぶつかり、激しい音を立てる。

幸い、カップは割れなかったけど、ウサギのぬいぐるみには、倒れたカップからこぼれた紅茶が大量にかかり、ケーキもべったりとくっついてしまっていた。

「あ……ごめんなのだ、マナっち……」

「ご、ごめんなさい、ボクがすっかりウサちゃんを持っていれば……。マナさんの大切なぬいぐるみなのに……」

「わたくしも、調子に乗りすぎてしまったわ。ごめんね、マナ」

みんなは、すぐに謝ってくれた。
でも、このぬいぐるみは、あたしの大切な……。

「ふにゅ〜。大切なぬいぐるみなのに〜……」

あたしの目には、涙がにじんできていた。
それなのに、カリンちゃんは……。

「でも、もともと汚いぬいぐるみだったし、不幸中の幸いって感じかもしれない〜」

ひどいよ！ そんなこと言うなんて！

「カリンちゃんのバカ！ うにゅ〜ゅ〜！ もう帰って！」

あたしは思わず大声を出していた。

「帰ってって、数学は……」

「もういいもん、ひとりで頑張るもん！ いいから、帰ってよ！」

あたしはそう叫んで、ぐちゃぐちゃになっていたテーブルの上を片づけ始める。

「あの、マナさん……、ボクたちも手伝うよ……」
「いいから、帰ってってば！」

おどおどしながら申し出てくれたセイカちゃんにも、あたしは怒鳴り声を上げることしかできなかった。

あたしは黙々と片づけを進める。

やがて、なにか言いたそうな視線をあたしに向けながら、みんなはそのまま部屋を出ていった。

「あらあら、みんな、ごめんなさいね」

すぐに部屋の外から、状況がわかっていないのか、お母さんがみんなに声をかけるのんびりした声が聞こえてきた。

こうして、あたしの最悪な勉強会は終わりを告げたのだった。

次の日の朝、あたしはいつもより早めに家を出た。

そして、みんなと口を利かぬまま、期末テスト最終日の山場、数学のテストが開始された。

うう、やっぱりわからない……。もっとみんなに教えてもらってれば……。

って、ダメダメ、そんなこと考えちゃ！あたしはひとりで頑張るんだ！

でも……。ふにゃ……。やっぱりチンプンカンプンだよ……。そんなこんなで、テストの最終日は、散々な結果が目の前に見えるような状態で終わった。

「マナっち、どうだったかに？」

いつもと同じく、カリンちゃんが真っ先にあたしのそばまでやってきて、声をかけてくれた。

でも、いつもよりちょっとだけトーンが低い気がした。カリンちゃんでも、少しは気にしてるのかな。

「んつと……テストも終わったから、帰りにみんなでお買い物にでも……」

セイカちゃんとは相変わらず遠慮がちに、上目遣いであたしの様子をちらちらとつかがいながら言う。

「そうよ。気晴らしにぱーっと、ね。もちろんマナも行くわよね？」

レイちゃんも、笑顔を浮かべながらあたしに話を振る。みんな、あたしを気遣ってくれているのはよくわかった。

でも……。

ガタンッ。

あたしは立ち上がると、机の横にかけてあったカバンを素早くつかみ、なにも言わずに教室を出た。

昨日のことについては、もちろんあたしだって悪いと思ってる。大切なぬいぐるみを汚されたのはすぐに謝ってくれたし、あたしとしても、みんなを許さないつもりなんてまったくなかった。それなのにカリンちゃん、あんなことを言うなんて……。

小さい頃のあたしは、今以上に、ドジでのろまなカメだった。はうゝ、とかふにやゝ、とか言いながら、なにもない平坦な道でいきなり転んだり、ぼーっと歩いてたら他の人とぶつかったり、先生から言われたこともまともにできなくてすぐに泣き出したり。……今と大差ないけどに。カリンちゃんなら、そんなツツコミを入れそうだけど。

ともかく、あたしはいつも泣いていた。

そんなあたしを慰めてくれるのは、いつも、カリンちゃんとレイちゃんのふたりだった。

小学校一年生のとき、あたしたちのクラスには、名前を覚えるためか、全員の名前と誕生日が書かれた紙が貼ってあった。

「マナっち、もうすぐ誕生日なんだに」

「うふふ、そうみたいね」

そう言ってあたしに笑顔を向けるふたり。

「うん、そうなの」

誕生日はやっぱり特別な日だから、思わずあたしも笑顔になっていた。

その後、いつもは一緒に学校から帰っていたのに、ふたりは用事があるからと、あたしを先に帰すようになった。

考えるのが苦手なあたしは不思議に思いつつも、言われたとおりひとりで帰った。そんな日々が続いて、あたしはちょっと寂しかった。

そして、誕生日。ふたりはあたしにプレゼントを渡してくれた。

ふたりの「用事」というのは、そのプレゼントの準備だったのだ。

先生に頼んでお裁縫を教えてもらい、可愛いものの好きのあたしのために、ウサギのぬいぐるみを作ってくれた。

ウサギはレイちゃん作、ぬいぐるみに着せてある服はカリンちゃん作。ふたりの合作だった。

まだ小学校低学年だったし、先生もそれなりに手伝ってくれたのかもしれないけど、やっぱりちょっと不恰好なウサギのぬいぐるみでも、心の底から嬉しかった。

だからあたしは、それをずっと大切にしてきた。

時間が経って薄汚れてきてはいたけど、大切さは薄れたりなんてしない。

あたしの大事な宝物――。

それなのに、あんなことを言うなんて。

レイちゃんもそのことについては、なにも言ってくれなかったし。

カリンちゃんもレイちゃんも、もう忘れちゃったのかなあ？

あたしのためのプレゼントなんて、その程度のものでしかなかったのかなあ？

翌日。

すぐに数学の授業があり、テストの結果が帰ってきた。

昨日の今日なのに、もう採点を終わらせたなんて。早兔子先生も頑張って採点したみたい。

結果が怖いあたしとしては、もっと遅らせてもらったほうがよかったわ。

そう、数学は早兔子先生の担当なのだ。こんなに数学の似合わない先生もいないと思うのだけど。

あたしは、先生から名前が呼ばれるのを、ビクビクしながら待っていた。

「綾音さん」

「ふあい」

思わずちよつと声がこもってしまった。

うつ、足が重いよ……。

早兔子先生の目の前まで出て、答案用紙を受け取る。

「綾音さん、その、申し訳、ないです、けど、その、補習、します

……。放課後、残って、ください、ね……。」

ふ、ふにゅ……。やっぱり……。……。

「は、はい……。」

力なく返事をして、気の抜けたように席に戻る。

それにしても、全員の前で言わなくても……。あたしの点数がひどいってこと、みんなにも知られちゃったよ……。

そして、放課後になった。

「あの、マナさん……」

おずおずと声をかけてくるセイカちゃん。
でも、

「セイカっち、行こ」

カリンちゃんがセイカちゃんの腕をつかんで、ふたりとも教室を出ていってしまった。

教室には、すでにレイちゃんの姿もない。

補習になったのはもちろん、あたし自身のせいだけど、みんなにまったく原因がないってわけじゃないのに。

自分からみんなを無視しておいて自分勝手かもしれないけど、みんな薄情だなんて、思わず考えてしまっていた。
やがて、ドアを開けて早兔子先生が入ってきた。

「そ、それでは、補習を、始め、ます……」

あたしは、先生から渡されたプリントに書かれた問題を、黙々と解いていく。

でも、あまり頭に入ってこない。

とりあえず自分なりに頑張ってはみたものの、明らかに間違ってるだろうかと、自分自身でもよくわかってしまっていた。

そんな様子を黙って見つめていた早兔子先生だったけど、西陽が教室に差し込む頃、ふとあたしに話しかけてきた。

「綾音さん、どうか、したの？」

ふにや。

ちよつと驚いた。

いつもおどおどしてる早兔子先生でも、やっぱり教師だから、しっかり生徒の様子を見てるってことなのかな。
でも、

「べつに……」

素直になれないあたし。

そんな応答も予想の範疇だったみたいで、早兔子先生は言葉を続ける。

「そう？ でも、イライラしてる、みたい。お友達と、ケンカでもした？」

意外と鋭い。

他人事のように、そんな感想を持った。

「話して、みると、すっきりする、かも、しれない、よ？」

そう言ってくれる先生の微かな笑顔は、教師らしい包容力を持っていた。

「えっと、実は……」

あたしは、自分でも意外なほど素直に話し始めていた。
じつとあたしの話を聞く先生。ひとしきり話終えたあたしに、こ
う尋ねた。

「それで、あなたは、どうしたい、の？」

「それは……」

あたしは迷っていた。

仲直りはしたいけど、でも、やっぱり怒りの念は消えていない。
カリンちゃんとレイちゃんがもう一度謝ってくれるまでは、あた
しからはなにもできない……。

と、そのとき。

ガラガラ。

突然教室のドアが開く音が響いた。
そこには、みんながいた。

「マナっち、やってるに」

カリンちゃんだ。

「んふ、みんなで押しかけちゃった」

セイカちゃんだ。

「ふふ。お疲れ様」

レイちゃんだ。

ふにゃ、みんな、心配して来てくれたんだわ！
思わず瞳が潤む。

でも、さらに後ろから、別の面々が教室に入ってきた。

「くすくす。こんにちは」

あれ？ ミナミ先輩？

「おほほほ。さすがマナさん、期待どおりの結果を見せてくれますわね」

ええ？ 会長さん！？

「やあやあ、マナちゃん、今日も可愛いね」

「うわっ！？ 流瀬先輩！」

生徒会執行部の先輩たちまで揃って……。いったいどうして！？

「うふふ、わたくしもお呼ばれさせていただきました。あつ、お呼ばれといえば……」

「うにゃ！？ 学園長さんも！？」

「ふふつ、あたしも来たぞ！」

雷鳴先生まで！ 遠慮のかけらもなく、長そうなお話を始めていた学園長さんに蹴りを入れてるし！

あたしは、驚きの表情を隠せなかった。
「いったいこれは、なんなのだろう？」

「うきやつ。びっくりしたみたいだに……？」

ニヤニヤと笑っているカリンちゃん。
レイちゃんやセイカちゃんも、そして他の人たちも、みんな笑ってる。

「……そうか。」

みんなヒマなんだわ。

だから、あたしをバカにして笑い者にするつもりなんだわ。
ヒマ潰しのために。

大勢でバカにしたほうが楽しいかと思って、カリンちゃんたちは、先輩や先生にまで声をかけたんだ。

みんな、ひどいよ……。

ほんのちよつと前までとは打って変わって、悲しい涙が溢れ出す。

「なによ、なによ、なによ！ みんなしてあたしをバカにして！」

一瞬きよんとするみんな。

でも、すぐにあたしの思っていることを察してくれたのだろう、レイちゃんが一步前に出て、あたしをそつと抱き寄せた。

「ほんと、バカね。わたくしたちは、そんなにヒマじゃないわ」

レイちゃんの温もりで、あたしの心も少し落ち着いてくるのがわかった。

でも、まだ状況はよくわからない。

涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げ、あたしはレイちゃんを見上げる。

「みんな一緒にのほが楽しいから、そう思ってた。マナ、あなたはひとりじゃないのよ」

みんなは本当に、あたしのためを思ってたんだ！

あたしは、頬が熱くなって、そんな顔を見られるのは恥ずかしくて、レイちゃんの肩に顔をうずめた。

「マナさん、これ……」

しばらくして泣き止んだあたしに、セイカちゃんが差し出したのは、人数分のショートケーキだった。

「この前、ダメにしちゃったから、買ってきたの」

「ちょっと、学校に、ケーキ、なんて……」

早兔子先生が、さすがに注意する。でも。

「んふ、早兔子先生の分もあるの」

「ま、まあ、たまには、いい、でしょう」

先生……。

「他にもいろいろあるのだよ」

カリンちゃんたちは、たくさんのお菓子やジュースを取り出していた。

「こつちに机をいくつかくっつけて、テーブルを作りましょう」

レイちゃんの指示に従い、先輩たちや先生たちも手際よく宴会の準備を始めている。

えっと、これって、ほんとにあたしのため、なのかな……？
ちよっと疑問符が浮かんできた。

「マナ……」

ふと気づくと、あたしの目の前には、レイちゃんが立っていた。その横にはカリンちゃんが並んで、明るい笑顔を浮かべながらあたしを見つめている。

ずっと、レイちゃんがなにかを差し出した。それは……。

「ウサギの、ぬいぐるみ……」

どうして？

あたしの疑問に答えてくれたのは、カリンちゃんだった。

「わちらも、べつに忘れてたわけじゃないのだよ？ 大切にしてくれてすごく嬉しかったのだ。でも、ほら、自分たちで作ったものだから、ちよつと恥ずかしくて……。不恰好だったし」

「でも、それなら最初からそう言ってくれても……。それに、大切なのを汚されちゃったのに、あんな言い方するから、あたし……」

カリンちゃんとレイちゃんの想いはしっかりと感じられていたのに、この期に及んでもまだ素直になれなくて、あたしは思わず不満を口走っていた。

そんなあたしに、少し寂しげな視線を向けるレイちゃん。

「マナ、あなたは汚れたぬいぐるみのほうが、わたくしたち本人よりも大切だというの？」

「え？　そ、そんなこと、ないよ！」

当たり前だよ。

あたしにとつてカリンちゃんとレイちゃんは、何物にも代えがたい大切なお友達だもん。

もちろん、ここに来てくれた、セイカちゃんや先輩たちだって。

「みんなのほうが大切だよ！」

あたしは、はつきりと答えた。

「ありがとう！」

ぎゅっと、レイちゃんはあたしを強く抱きしめてくれた。

「ふにや、レイちゃん、ちょっと痛い……。っていうか、ウサギ、潰れてる！」

「ああ、わたくしとしたことが！」

「きやはは！」

みんな、笑っていた。

もちろんバカにした笑いじゃなくて、心から湧き上がってくる笑い。

「わちも悪かったのだ。ごめんに。これからよろしく、マナティ！」

「マナティ言うなあ！」

怒鳴りながらも、あたしは温かい気持ちでいっぱいだった。

「マナ。このぬいぐるみ、前は汚してしまっただから、おわびとして新しく作ったの。小学生の頃と同じように、わたくしとカリンの合作よ。昨日、あのあと急いで準備して作ったものだから、あまり丁寧な作りではないけれど」

レイちゃんが再びぬいぐるみを差し出す。

「受け取って、くれるわね？」

あたしは軽く頷いて、そのぬいぐるみを腕に抱く。
ふたりの温もりが、伝わってくる気がした。

「あつ、でも、前あげたのの代わりに、ってことじゃないからに？」
「あの頃のわたくしたちの友情と、そして今のわたくしたちの友情を、これからも変わらずに大切にしてもらえたら、そう思ってるわ」

カリンちゃん、レイちゃん……。

「うん、もちろんだよ！ ふにゅ、ふたりとも、大好き♪」

あたしが笑うと、カリンちゃんもレイちゃんも、満足そうに微笑んでいた。

「……ふにゅ、でも、あたしなにもお返しできないよお。不器用だから手作りなんて無理だし、お小遣いも少ないし……」

「バカね。気持ちだけで充分よ。わたくしたちは、マナがいつも笑顔でいてくれたら、それでいいわ」

レイちゃんの言葉に、カリンちゃんも頷いていた。髪留めに結びつけた鈴をチリンと鳴らしながら。

「いい、お友達を、持った、わね……」

早兎子先生も、優しく声をかけてくれる。

「はい！」

今度は素直に答えることができた。

「でも、補習は、続き、ます……」

「ふにゅ……」

先生は、おどおどした声ながらも、容赦がなかった。

「まあ、わちらは待ってるから、ゆつくり補習するのだよ」

「ふふ、そういうことだから、頑張ってるね」

補習を再開したあたしと早兎子先生をのけものにして、宴会はしつかりとスタートするみたいだった。

「うふふ、ポテチはこちらに置いておけばいいかしらね？」

「優しい僕が、ジュースを入れてあげるよ。みんな、どれがいいかな？」 オレンジとグレープとアップルがあるよ」

「んふ、ボク、アップルで」

「私はオレンジをいただきますわ」

はあ……。みんな、さすがにちよつと非常識かも。
そう思いながらも、全然嫌な気分ではなかった。

「ほら、マナっちも食べるといいのだに」

カリンちゃんが紙皿に乗せたお菓子類を、あたしの机の上に置いてくれた。

「ちよつと、補習中、なんだから、さすがに、ちよつと……」

「はい、早兎子先生も！」

「あら、ありがとう。うん、たまには、いいわよ、ね……？」

せ……先生……。

そんなこんなで、あたしはお菓子を食べつつ、まったりと補習をするのだった。

「ジュースのおかわりあるよ？ いる人？」

「んふ、ほしいです」

「あつ、あたいは、ビールをもらおうかな。学園長もいるかい？」

「あらあら、うふふ。いただきますわ」

「ちよつと雷鳴先生、学校でアルコールなんて……」

「いいじゃない、細かいことなんて言いつこなしですわよ。せつかくの宴の席なのですから。ミナミさんはほんとに頭が固いですわね」

「でも会長！ 雷鳴先生はともかく、学園長さんが酔っぱらったら大変なことになるんじゃない……」

「ああ、そうだった！ 学園長、あなたはビールじゃなくてジュースに変更……って、もう飲み干してる！？」

「うふふふふ、体が熱くなってきましたわ、ヒック！」

その直後、教室は巨大化したピンクのドラゴンによって、綺麗さ

っぱり破壊されていた。

破壊された教室は、次の日には先生方の魔法ですっかり修復された。

そして数日後。

無事すべてのテストが返されたけど、あたしは赤点もなく、無事に夏休みを迎えられそうだった。

数学も補習のおかげでどうにかセーフだったし。

でも……。

一学期の終業式の朝、登校中にみんなと合流したあたしは、ある不満を訴えた。

「太った~~~~~!!」

もちろん原因は補習の日のお菓子やジュース。

紙皿が空っぽになると、カリンちゃんが次々に乗せてくれて、勉強中ってついつい手が出てしまうもので、あたしは思った以上に食べて飲んでいたのだ。

「うきゃっ！ 狙いどおりなのだに！」

「ふふ、そうね。もっと食べさせれば、ころころまるまる太ったマナを見られるかしら」

「え〜ん！ ひどいよお〜！」

「んふ、やつぱりみんなといると楽しい♪」

「あたしは楽しいiiiiiiiiii!」

澄み渡った青空の下、朝の通学路にあたしの叫び声がこだまする。もう夏はすぐそこまで迫っていた。

6 (後書き)

話としては全然完結させていませんが……。
とりあえず、一旦ここまでで完結としておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770y/>

マナ娘のまなびや

2011年11月4日02時03分発行